明治廿七年一月廿四日發行

女鑑

第五十五號

東京國光社

女鑑第五十五號目次

大姫



女鑑 第五十五號

女鑑

寒夜懷を述ぶ

人は、其の才能の優れたらんよりは、寧、其の徳器の、全く備はらんことをこそ、良とはすべけれ。而して、婦人の、ことに然らざるべからざるは、吾人の言を俟たさるところなり。されば、古歌に、

春の夜のやみはあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくるゝ

といひ、また、唐土の司馬光の言に、「才勝レ徳、之謂二小人一、徳勝レ才、之謂二君子一。」といへるも、皆、徳を養ふを、第一の務とし、其の徳を全うすれば、必、外に表れて、掩ひ隠すべからざるに至るをいへるなり。

さて、徳を養ふは、いと難きわざなれども、また、易き法なきにあらず。昔より、寒き冬の夜に、書を讀むは、學者の常とするところにて、實に、寒き時は、人の心の、能く、靜に鎭まるものにて、且、また、夜の長きも、自、書讀み、物學ぶに適當なるものなればなり。

今は、恰、この好時節なれば、徒に過ぐさで、日は終日、夜は盡夜、書を繙きて、古人の嘉言を聞き、善行を見て、巳の行を矯め、其の心を正し、其の身を修めなば、自、其の徳を養ひ長ずることを得るに至らんは、必然なり。即、

　尋ねずはかひなからまし古の代々のかしこき人のことの葉

とある如く、人は、人を以て、鏡とすること、萬古不易の定法なれば、必、古人の書を讀み、古人の行を見、古人の誠を聞き、古人の敎に從ひて、徳器全備の人となら

んことを期すべきなり。

かくて、國に、内外の別ありて、各、歴史、性格を異にし、風俗、人情を殊にせり。かかれば、ひとしく、古人と稱し、彼は、彼の先人の言行を以て、重んずるに足れりとするも、我、直に取りて、之を學ぶべきにあらざれば、吾人が、德器全備の人とならんことを期して、其の龜鑑とすべきは、吾人の先人の他あるべからず。

されば、吾人の、第一に讀むべきは、則、我が皇國史なり。何となれば、我が皇國史は、實に、吾人の模範とすべき事蹟を以て充たされたる萬世不磨の典經なればなり。皇國史は、人道の標準として、人倫の經典として、はた、道德の本經として、われ人の、必、研究すべきものにて、決して、他國の史籍などゝ、同樣に見るべきものにあらず。宇内無比の道德書ともいふべきは、實に、我が皇國史なりけり。抑、皇國

の古史に載せられたる事蹟は、一として、吾人の龜鑑たらざるものなければ、皇國人の鎔範たるものは、此の上に出づるものあることなし。されば、これを、能く讀み、能く味ひ、古を稽へて、今に徵し、能く、時勢と、人情とを酌み量りて、博く究め、深く探りて、古人の忠孝を學び、能く、其の中を執り、其の程を制して、過つことなくば、眞の、道を知る人となり、其の德器を全うすること、いと易きのみ。

皇國史は、かくの如く、尊び重んずべきものにして、われ人の、必、讀まであるまじき書なれば、あはれ、諸孃、夜の長きに、徒なる物語して過ぐさんよりは、かゝる尊き皇國史を繙きて、其の大本を養ひ給へかし。

論説

仁愛と義理（承前）

大林弘一郎

次には、君臣の愛情なり。凡、君臣といへる關係は、遠く、上古の時より、一定して不變なりといへども、世の變遷するに從ひて、種々の關係を生ずるなり。即、昔時封建の時代にありては、其の君と仰ぐ所は、固より、　天朝にあれども、其の下に、將軍あり、又、其の下に、藩主あれば、臣民たるもの〻、君に仕ふるは、其の身分によりて、各、異なる所あり、甲藩の民は、乙藩の民に非ず。甲藩の臣は、乙藩の臣にあらず。又、諸侯の臣下は、將軍の臣下にあらず。將軍の臣丁は、直に、　皇室に、臣事することあたはず。かく、階級あるときは、その務むる所の義、その親愛の

情にも、亦、階級あるは、當然なり。故に、その主從の義、君臣の情は、其の範圍の中に於いて行はれたり。王政の今日にありては、君と仰ぎ奉るべきは、我が大君の外あることなく、吾人四千萬人は、皆、臣民たらざることなし。是に於いて、君臣の義は、信に、單純となれり。さて君の、下を親しみ惠み給ふ情は、父母の、其の子に於けると、毫も異なることなし。寒飢には、之が衣食の用を優ならしめ、疾痛艱苦あれは、之を救恤して、其の憂患を脱せしめ、以て、其の相生養親愛する情を遂げしむ。これ、則、君の愛情なり。臣民の、上に奉るは、子の、父母に奉るに同じく、その愛敬の誠を盡くして、常に、その同祖一源に出でたることを念ひ、又、その祖先以來、洪恩仁澤に沐浴せる　皇室なることを心にして、朝夕に、この鴻恩を報せん爲、その親に孝に、其の身を愼み、過失あることなく、各、自、その分限に從ひて、

其の務を懈らず、其の職を重んじ、臣民の義を正しうし、國憲國法を遵奉し、以て大君の、下臣民を愛撫し給へる大御心に酬い奉るべきなり。女子は、もと、夫を、主君とすることなれども、臣民の義に於いては、少しも、男子に異なることなければ、其の務むべき道は、同一ならざるべからず。故に、その父母、夫、昆弟、姉妹に和睦にして、一家無事、好合の美を致すは、即、　大君の大御心に酬い奉る第一の本務なり。然れ共、唯、其の君に事へて其の心に從ふをのみ、眞に、君を愛することゝ思ふは、大に誤れることなれば、事の是非善惡を、能く辨別して、必、其の正理に從ふべし。これ、亦、義理を以て、其の愛情を制裁して、其の宜に適はしむるものなり。

次には、夫婦の愛情なり。人に、男女あるは、天地自然の理にして、夫婦の倫は、この理に由りて立つものなり。其の相親愛する情に至りては、恰、父子の情に異なら

ず。然れども、其の天性の至情にのみ任せて、其の間に、義理を存せざるときは、互に、其の親愛の厚きに狃れて、終には、相輕んずる弊を生じ、夫は、妻を輕侮し、婦は、夫を蔑視するに至るものなり。是、皆、愛に過ぎて、義を忘れ、義を以て、愛を全うする理を辨へざるの過なり。故に、其の夫を親愛し、其の好情を全うするの道は、必、義理を本とし、其の身の行爲に於いて、深く、其の心を留め、其の意を用ゐて、正道に悖る所なく、常に、之を以て、百般の務に當る時は、必、其の情義を保つことを得べきなり。

次には、兄弟の愛情なり。兄弟は、天屬の親にて、己と、大に、其の年齒をも違へざるものなれば、終身の好友、之に如くものなし。されば、其の情に於いても、一層、其の深きを覺ゆるなり。譬は、父母に對して、語り難き事をも、容易に議すること

を得るは、兄弟なり。かゝる私情をすら、達するを得るものなれば、其の相狎れ易きは論なし。故に、其の間には、最、義理を重んぜざるべからず。世には、私情、私慾の爲、此の天屬の親を傷ひ、兄弟、財を爭ひ、之を、法庭に訴ふる等の醜體を表すものあり。長幼の序を正しうし、親愛の誠を篤うするものと、相比せば、其の醜美、果して如何ぞや。豈愼まざるべけんや。

次には、朋友の愛情なり。朋友は、もと、其の親因あるものにあらず。然れども、學を修め、業を成すに當りて、必、相提携し、相互に、琢磨砥礪して、其の忠孝の實行を輔益匡救するに於いて、必、無かるべからざるものなり。故に、五倫の中に入るるなり。されば、その間に行はるゝ道は、信實にして僞なきにあり。其の相信ずるは、即、其の情を全うする所以の大本なり。若、其の信義を缺ぐときは、其の愛は、

眞の愛にあらず。譬へば、其の惡を見て、之を匡救せず、好言を以て、之に接するが如き、是、全く、其の友を賊するものと云ふべし。唯、其の意に逆ふを恐れて、其の誠意を盡くさゞるが如きは、尤、友誼を重ずる道にあらず。故に、常に、心を、此の際に用ゐて、敢て、終始あることなかるべし。これ、その愛情を全ふする道なり。

以上論述するが如く、人の、相愛し、相親しむ情は、必、義理の制裁によりて、其の終始を全うするものにして、仁愛と、義理とは、人間の、須臾も離るべからざることと、恰、車の兩輪、鳥の双翼の如くなるものなれば、苟、人倫を全うし、人情を厚うして、千古に愧ぢざる行を立て、人と生れたる責任を全うせんとするものは、必、先義理の穿鑿を爲さゞるべからず。これ、第一の急務なり。人の、正路を履みて、安宅に居る所以は、必、此の外に出でざるなり。嗚呼、豈勉めざるべけんや。

女子要言　第二篇（廿七）

三輪田眞佐子

以下、女子の人物に就き、聊述べんとす。抑、人は、知覺運動のみを能くする普通の動物と、類を同じうするものと思ふべからず。若、知覺運動のみを以て、人の資格備はれりとせば、あはれ、人は、此等動物よりも劣らん。見よ。人の美裝は、孔雀に及はず、齡壽は、龜鶴に若かず、力量は虎豹に劣ることを。然れども、猶、以て、萬物の靈と誇るに足る所以のものは、其の性、高妙の懿德、及、智識を有すればなり。即、其の德と、智とを有する適度如何に從ひて、人品定まるなり。蓋、人、誰か、下品の人たるを惡みて、上品の人たることを欲せざらん。而して、天下諸孃の、汲々と勉學するも、其の、目的、上品の女子たらんと願ふに外ならず。されば、茲に、人物を論じ、其の品類を評し、敢て、諸孃の標準として、誤らざる女子を描出するは、頗、肝

要なり。吾は、恒に、今日の女子敎育は、寧、注入的才藝敎授に傾き、人物養成の點を顧みざるものにあらざるかを疑ふ。熟、現時の女子敎育界を見よ。男子にして、女子敎育の任に當るものは、幸に、温厚の君子多ければ、間然すべき所なしと雖、女敎師に、適任のもの、乏しきが如し。然るに、敎育の目的、果して、人物養成にあらんか。男子の女子敎育家其の人を得るのみにては、尙、不可なり。必、完全なる女子敎育家の、任に當り、親しく、生徒の母となり、且、師となり、其の言動、悉、活模範となるものあるにあらざれば、其の目的を達する、難からん。然るに、今日は、活模範とするに足る女敎師、甚少し。則、女敎師にして、女德を欠き、女事を辨へざるものを以て、敎師に任ぜんか、勢ひ、生徒たるものは、才藝のみを學ぶの外なし。吁、之を察せずして、女學生の言動、其の當を得ざるを罵るものは、恰、手本を與へず

して、能筆たれと責むるに等しからざるなきを得んや。是、目下、女子教育の振はざる一原因ならん歟。

人物の標準は、女子の天禀を離れずして、女德を修め、女事を果し、衆望を全うするものにあらざれば、不可なり。故に、世に、男子的の女子ありて、其の起業の成効、大に、驚嘆すべきものありとも、之を稱して、未、好人物となすに足らず。强ひて、之を名づくれば、異秀の女子とも云ふべきなり。蓋、上野の形名の妻の如く、君のため、夫の爲、變に處する所以の勇氣は、女子も、男子の如く、備へざるべからずと雖、平和時代の女子としては、苟、天禀を離れたるものは、模範とする能はず。或論者は、女子の特質を曲げて、男子と同樣にせんとす。されど、女子の特質は、天禀の爾らしむる所なれば、敢て、棄つべきにあらず。乃、女子の小心翼々として、感情に

昔、三年の富むは、其の性なり。故に、半宵夢覺さめたるとき、聞く杜鵑の一聲を、吹き既に、遠逝せし愛兒の聲かと疑ひ、立ちて、窓を排き、明月に泣き、或は、秋風、女て盡きず、擣衣の聲哀なる夜、遠征せる良人を思ひ、袂を沾す如きを見て、以て、此の子の弱點とするものあるは、非なり。否、是ぞ、女子の愛する美德なる。强ひて、此の情を削らんとするものは、天禀を破らんとするものなり。試に思へ。聊、書を讀み、男子的の剛腸と、冷淡とを倣ふ女子は、世人に忌まるゝにあらずや。是、天禀を離れんとするより受くる自然の報なり。書曰、惠迪吉、從逆凶、惟、影響と其の他、綿密にして、能く、事物に注意するを以て、大に、男子より賤しまるゝも、此の綿密こそ、能く、時風を慮りて、家族の衣帶を調へ、磊落なる良人の遺漏を補ひ、家政を主どるに必要なれ。「スペンサー」曰はく、女子も、亦、男子と共に、社會を經營せさ

るべからず。と、實に、男子放膽なるを以て、大要を行ひ、女子綿密なるを以て、小樞を務め、互に、相待ちて、始めて、社會を經營し得るなり。誰か言ふ。隻輪の車、能く轉し、片翼の鳥、能く飛ぶと。尙、堪忍、勤勉、小心、温和、等は、女子の天眞なり。此の天眞の發達するものを外にして、女子人物の標準を求めんとするは、不可なり。一言に、之を約すれば、男子めきたる達女より、女子らしき秀女を、標準とせんこともがな。

善惡の分かるゝ所、正邪の定まる所、其の間、髮を入れず。例之ば、節儉と、吝嗇とは、似て非なるが如し、上に述べし女子の特質は、亦、似て非なる癖を生じ易し、卽、女子は、多く、嫉妬の心ありて、人の美を忌み、善を惡み、己より秀づるものは、讒言し、己より劣るものは、輕蔑し、甚しきは、兄弟、親戚、及、知人の親睦さへ、離間

するに至る。是、其の小心にして、感情に富み、而して、未、克巳の道を學ばざるに由る乎。從二位爲子の歌に、「心たに、己がおもふには、かなはぬを、人を恨みんことはりぞなき」とあり。若、天下の女子、擧げて、此の心を持たば、男子より譽められ、且、自も、安からん。或は、女子は、一見、自遜するもの丶如しと雖、其の實、暗々裏に、自負するもの多し。見よ、聊、學事に通ずるものは、陰然、傲慢の氣、顏色に顯れ、裁縫、遊藝等も、各、長する所を揚げて誇るめり、或は、美人は、醜婦を笑ひ、富貴なるものは、貧賤なるものを嘲り、甚しきは、己の親類、知人の名聲を以て、己が自慢の種として悅ぶものあり。加之、女子は、世界を見ること、狹きが故に、識量卑しきにや、又、從來、學問を修むる、稀なる故に、分別鈍きにや、其の心、朝に變はり、夕に、移り、恒に、中途を離れ易し。乃、文質彬々の盛善を云へば、忽、奢侈に流れ、風流閑雅

の快樂を云へは、忽、遊逸に陷るもの多し。吁、苟、中途を守る心なき女子は、其の兒を愛せんとするも、愛とならず、其の親に孝せんとするも、孝とならず、其の夫に貞せんとするも、貞ならず。之を、愚なる女子といふ。而して、其の弊を去るは、教育にありと雖、文字、及、手藝はかりを學ぶもの〻、能くする所にあらず。獨、精神を修養する女子のみ、賢きものとなるを得む。

以上の如き弱點なければ、直に、好人物と云ふべき乎。曰はく、そは、唯、尋常の女子と云ふ。苟、好人物の名目を附すべきものは、他に秀づる所なかるべからず。

然らは、好人物たる所以のものは、多藝にある乎。否、元來、歌を詠じ、文を綴り、音樂に長じ、裁縫、編物を巧みにし、及、活花、茶湯、女禮等の道をも辨ふるは、女子の、各、勤むべきものなりと雖、此等は、機械的の末藝に屬し、未、好人物の眞髓とする

に足らず。世には、輕重、本末を顚倒し、唯、末藝を以て、女子修學の主たる目的と信じ、略、此等の藝を備ふるものを、直に、新日本の賢婦、秀女となして、賞賛するなきにしもあらず。蓋、此等の藝は、勿論、女子の知るべきものなりと雖、亦、男子さへも、學はゞ、何、能く、なし得るものなれば、是を以て、未、女子人物の價値を定むるに足らざるなり、唯、藝を知るは、知らざるに勝ると云ふを得べし。但、藝のみを知りて、他を知らざるものは、反りて、害をなすことも多からん。故に、今日の女子、唯、清少納言を凌ぐ藝能あるものなりとするも、其のみにては、好人物と云ふ能はざるべし。

史談

大姫

鹽井雨江

松柏にのみ、獨り、尠く霜の、惡からざるには非ず、唯、松柏は、わが初めたる緑の色は、ゆめも變へじ、わが世の色は、えも移さじといふ、心の堅ければこそ、あはれ、惡き霜の力、野に山に、移りに移る、草木が中に、誠に、松柏の緑のみは、遂に動かぬなめれ。

千引の岩は、引くに難しとは、いふめれど、千引の力もて引かば、引かなむ。實に、人の力を盡くしたらむには、八重の峯なす尾上とて、毀たば毀ちも盡くさなむ、八重の汐なす荒海とて、塡めなば塡めもはたしてむ、實に、力あらば、山も裂かなむ海も塡めむ。

さはいへ、世の中の誠實あらむ人の赤心ばかりは、何にゝか動かむ。何にゝか移らむ。霜にまかさぬ松柏の緑もものかは。實に、心ある人の操ばかりは、いかならむ、力の、いかに爲したらむとて、動くべきものにはあらじ。動かでこそ、操は操なれ、

移らでこそ、人の赤心は赤心なれ。あはれ、此の操、此の赤心、大姫が物語り、讀まなむ人は、必ず知るよしあらむ。

大姫といふは、源の頼朝の長女、鎌倉山に、秋津島根を睨みわたしたる、頼朝の長女にて、母は政子、實に、尼將軍としはやされたる政子なりけり。あはれ、大姫、誠に英雄の家に生れ、權謀の帷幕に養はれたれど、いたづらなる猛き心は露をかり染ます、實にや、優しき小姫松、緑の色の清きがごと、緑の色の柔しきがごと、大姫の心は、柔しかりけり、はた、清くもありけり。

はじめ、頼朝、源旗を鎌倉に建つるや、源の義仲といふ者、又、木曾の山風に、白旗を飜へして起り、北越の山野を打ちなびかしたるさま、旭のとよさかのぼるむかりの勢なりけれど、頼朝は、何となう、心の中におもしろからず、わきて、義仲が、行家に心を添へたるより、頼朝は、いつかはと思ふ所なり、今はゆるさじ、あはれ、行家を棄すど、義仲の子、清水冠者義高を質に納めむ、さらずば、兵馬もて、互にあはむといひやりたれど、義仲は、思ふやう、余も兵馬は辭する所にもあらじ、されど、平家の兵馬と戰ひ、平家を仆さむてこそ、わが素志なれ。又、行家、折角、余

を頼みて、來たりしものを、むげに、棄てむも、武士の志かは。やむなければ、義高をこそ、まゐらせめとて、わが子を頼朝に送りて、二なき心の證しと爲たれば、頼朝も、されどもともいふべきにもあらねど、義高さへ預らむ、疑ふ事はあらじど、義高を、おのが館に迎へ預りて、おのが長女、やがて、此の大姫の夫と定め、今よりは、義高こそわが婿なれ、余も、又、他の心はあらじとて、頼朝、義仲の、互に、打ち解けたるは、壽永といふ代の二年といふ年なりき、されど、久しからず、遂に、干戈を交へでは叶はぬ事とありぬ。よしは、樣々ある事ならむも、英雄の心事、亂世の事情、今更に、とやかくいはでやみなむ。宇治、瀬田の一戰、義仲は、兵やぶれて、粟津の原の朝ぱらけ、露とむかり、夢とばかり、消えたるこそ、あわれなりしか。

子なりけむ人の、心はいかなりけむ。思へば、頼朝とて、義高を安くは思はず、わが婿ながら、とても世に置かむ者にも思はねど、何時かは亡き者に爲しはてむと思ひたる、頼朝の心。斯くときくより、悲しきは、大姫の淸き心。やさしさは、大姫の赤心なりけり。

大姫は、義高と妹背を結びてより、あはれ、今よりは、義高の妻といはむ、大姫はあれど、大姫とばかりいはむ、大姫はあらじ。君ありてこそ、此の妻はあれ。君あらでは、余も在る身かは。みづからは、君の影、君のみ影と思ふ心は、尾の上の雲の靉く隙も無く、麓の水のよどむ方も無く、常にかも、此を我世とのみ、此をわが夫とのみ、思ひかしづきたる、大姫の優しき心は、誠に、やまと島根の女子なりけり。かばかりに思ふ、わが夫。むざんやな、殺さむといふ父の心。諫めむともせぬ母の心。聞きては、今更に、物も覺えず、父母はたふとし、夫はいとをし。何れかあはれの劣るべき。共に變らぬ軒の露、おきふし毎に、見まほしき人は、親なり我夫なりと思ふにつけて、いよ〳〵悲しく、父といひ、母といひ、實に姫がけふの身の親なり。親の恩義の山海は、越ゆべうもあらず、渡るべうもおぼえず。さはいへ、我世とも我命とも、深く染めにし、妹背の道は、唯、假初の色にはあらず、我せの命、守りもせず、我夫の悲嘆、救はずては、妻といふ道をいかにせむ。妻と成りては、妻の道ふみ遂げてこそ、人といふ道にもそむかざらなむ。今更に、何にためらふ事のあるべきやと思ひ定めて、大姫は、義高にしか〳〵と物語り、されば此處に、

斯く在りては、今日、明日をおぼえず、片時も束の間も、御側を去り奉らじと思ふ、わが心。悲しさはいはむすべ知らず、せむすべもあらざれど、願ふは、人知れず、此處を落ちさせられ、何處の峯なりとも、如何なる浦なりとも、とにもかくにも、御命ながかり、恙もなく渡らせ玉へかし。君在りときかば、余も、又、必ずや逢はむ世をこそ、思ひ頼みて、待ち侍るなれ。つね／＼のたまふ武將の御志の、徒らにならむ事、武士の妻と成りて、くちをしき事の限りに侍れども、涙ながらにときすゝめられければ、義高も、こは、頼母しき我妹のおん志かな。落涙の外を知らずといひて、なほかにかくと謀し合し、年月從ひたる武士、海野幸氏といふ者を留め置きて、義高は、自ら、大姫の侍女の姿にやつれて、在明の月、定からぬ光りを頼みて、おぼつかなくも、唯、獨り、迷ひ出でぬ。姫は、名殘りのをしみても、をしみても、をしまれて、義高の落ちゆかむずる、籬近くまで、送り來つ。思ひ定めたる事といへど、行くとしなれど、今更、更に、限りもあらぬうき思ひ。義高の袖を扣へて、こやわが夫、思へど物の思はるゝかな。風のよすがをねさせ玉はゞ、天にも音信を知らせてや。玉の緒糸の、くれ／＼も、頼むは是れのみと、のたまへば、義高も、そ

はいふまでも候はず、たましひあらバ、何時何處、天がけりても、必ずや、見え奉らむ、必ず、待ち奉ると、行くも、殘るも、果なき名殘り。見おくれバ、在明の月、かげうすく、其處とも見えず立つ霧の、晴れぬ天さへ心ありても、おぼつかなかりき別れなりけり。

大姫は、世に在りて、世に無き思ひ、暫時はよ丶とばかり、泣き沈みたりしが、さては、人にやさとられむと、強て思ひかへして、海野幸氏と共に、つねに義高の在りてし日のごと、わけもなき遊びにうち興したりしが、毎時まで隱れむやうもあらず、まひる時ばかり、遂にあらはれたれど、頼朝は大事なりとせきたち、堀親家といふ者に、兵者あまたひかしめて、義高の跡を追はしめ、追ひつきざま斬り捨てたりけり。(あるは、義高は討れず、逃れたりといふ說あれど、東鑑にも、鎌倉史にも、正史よは、此時、斬られたるよしあれど、信ならむ。)

かくとき丶たる大姫の悲嘆は、いかバかりなりけむ。書きも盡くさむ言の葉は、敢えておぼえじ。暫時は、ものもえいはざりしが、はては、泣き沈みたるま丶起ず、我せとよびては泣き、我夫といひては泣き、涙に身も殼とならむばかり。ものも欲

しからずとて、手にだも取り玉はず、餘りの悲嘆に、いたよわりによわりゆきて、いたつきのいと危うげに見えぬ。

母は、わが子の悲嘆、さばかり烈しきに困うじはてけり。とにかくにして、わが子の心、慰むよしもあらむかと、賴朝に圖らひて、殺さむとて追はしたる義高にはあらざりしを、殺したるは追ひたる者の過失なりとて、追ひたる者を引き出てゝ首を刎ねたり。

大姫の淸き心、やさしき心、なにしにかゝる事をや悅ばむ。なか〳〵に、姫の思ひ、いよ〳〵、うれしからず、ます〳〵、思ひむすばれて、とくよしもあらず。政子は、頻りに、大姫の憂きを晴らさむと思ひて、もし、草木の景色にも、心の染む事もあらむかと、強て、野山の遊びに誘ふも、草木の色は昔しに似たるものから、大姫の心、なか〳〵、過ぎにし人の思はれて、徒らに、懷舊のよすがと成るのみ。あるは、何の遊び、くれの舞ひ、人の面白しといふかぎり、世のをかしといふかぎり、呼び集ひて、昨日といはず今日といはず、日毎に遊び興じては、大姫の心の、うち興ずる事もやと思へど、わが思ふ人の余と共にあらねば、姫の心は、なか〳〵に、歌をきくも

舞を見むも、唯、斷腸の媒と成るのみ。徒らに思ひのいやましにますのみ。夫なき後の軒のつま、おきて見つ、ふして見つ、涙のかゝらぬ天なかりけるぞ、いとをしかりける。

政子ともいはむ智者も、子ゆゑには、痴者に似たり。花の年齢、月の姿ありながら、かくしかり、人を思ひなげき、かくばかり、打ち朽ちなむ、大姫のいとをしさに、愚や政子、義高にも勝りたらむ人を擇びて、夫とし爲さむ、心ならずも、姫の心の移らむ方もやと思ひて、かれを、これをと、思いめぐらすに、外甥に藤原高能(大日本史には藤原高保とあれど、余は、鎌倉史によりて、記すになむ)といふありけるが、紅顔、誠に、紅梅の艶に恥ぢず、柳腰、眞に、青柳のいとやさしかりけれど、政子は、折りふし、何となう、いひ出てゝ、姫の心を動かさむとしたれど、大姫の赤心は、いかならむ紅顔とて、又、染まむ色かは。いかならむ柳腰とて、え動かす心かは。大姫の心は、遂に、人の力の動かすべうもあらぬなり。大姫が、侍女に、のたまふやう、妾には、義高といふ夫あり、よしや、世に失せたりとて、心には消ゆるものかは。よしや、聲きこえず、影見えずとも、心には通よふ聲あり、影も通よへり。

わが夫亡しといふべからず。よしや、人には見えずとも、まさしく、夫は此處に在り、わが夫常に在るものを、母上の心のきこえずもある哉。夫ある者に夫擇び、強ても仰せあらむには、妾は淵河の淸き瀨を頼みて、潔く身を捨てむのみと語りけるを、政子は、うち聞きて、驚く事、大方ならず、遂に、高能の事は、又、云はずなりしといふ。

源義經、山海の險を踏み、矢石の難を凌ぎ、千辛萬苦して、討西の事僅に成りて、功は、筑紫の海のつくされずありながら、あはれむべし、兄賴朝の忌む所となりて、西海に奔りたる時、義經の妾に、靜といふものありけるが、捕らへられて、鎌倉に送られ來ぬ。舞ひに堪能なりときゝて、政子は、又、大姫を慰めむとて、側りちかう侍らしむ。大姫は、靜にのみは、賴母しげにしたまひけり、舞を見てには非ず、歌をきゝてにも非ず、唯、夫を慕ふ、靜の心の、余にも似たるあはれの、何となう、よそならぬ心地せられ、おなじ思ひ、おなじ悲嘆、一河の流れをくむ心地して、なづかしけれとなりけり。靜がゆるされて、鎌倉を離れたりける時は、誠の友に別れむばかり、引きとゞめ、ひきとゞめて惜しみたりといふ。大姫が義高に別れてより、

世の中に、あはれにしたるは靜のみ。かたかりに、惜しみたるは靜の事のみ。大かたは、うちとけては、人に語らず、はゝゑみては、物も見ず、唯、引き籠りゐ、引き籠りたれば、悲嘆の末は、又悲嘆　涙のはては、又、涙、獨り、つくゞゝながむれば、君が手にせし、御大刀をた、懸けてし床は在ながら、其大刀たから影も無く、共に植ゑてし窓の竹、綠は深くなりぬれど、ながめし人は散りにけり。見ろにつけつ、思ふにつけつ、いやますものは悲嘆のみ。なげきは、いたつきも、いよいよ重く、建久の末つ方、わが夫とのみ慕ひ慕ひて、あこがれ逝きたるこそ、あはれなりしか。

あはれ、大姫。まことに、姫小松の、綠の色、清きを變へず、綠の色のやさしさを移つさず、夫を慕ひ、夫を嘆きて、果てたりしこそ、誠に高き操なりけれ。父といふ力、母といふ力も、姫がやさしき操を移つすをえず、紅顏の色、柳腰の姿も、又、姫が心を動かすよしなかりしこそ、人の操といふもの、世の中のいかならむ力のいかにしたらむとて、ゆ動かぬものなりといふゑるしなめれ。

烈女竹子の傳

花山やすゑ

竹子は、會津藩士、中野平内が娘にて、嘉永二年、江戸に生る、その生れつき、柔順温和にして、能く、父母に事へ、弟妹を愛しみける、殊に、其容姿は、人にすぐれて美麗はしく、幼きより、筆取り、文讀む事を好み、最もやまと歌に長けたり。かく、平素は、温和なれども、又、武技をも、某の許につきて修め、頗、上達せりといふ。慶應戊辰の年、即、明治元年に官軍會津に入りて、事いと急なりけれど、藩士は兵を堺外に出して、戰はしめける、されど、味方利あらずして、勢大に挫け、八月二十二日に、境上石筵の柵敗られ、又、その翌日には、官軍若松の城に迫る、砲擊の響は、天地も動くばかりに轟き、煙は天を掩ふて、宛から暗の夜に似たり、その凄じさ、いはん方なし。この戰にて、五層の城櫓も、今や燒け失せんとする有樣なりければ、藩中の婦女、城に入りては、家に火を放ち、又は、自ら刄にかゝりて、死するもあり、その慘状は、實に見るに忍びざる有樣なりき。時に、竹子は、城中にありけるが、大に心を勵まして、今ぞ、此身を捨つるの秋なりと、かねて手馴し薙刀を脇に挾み、敵の大軍を見かけて、其中に突き入り、縱横に薙ぎ廻る、其

勢に、古の勇婦も及ばざる程に見ゑしが、もとより衆寡敵し難く、遂に力もつきて、はかなくも、刄にかゝりて失せたりける、實に口惜しき事にこそ。時に竹子、年漸く十九なりき、その天性の温順にして、能く父母に事ふると、學問を嗜み、武藝にまで、心を用ゐて、事あるの日には、かく猛く雄々しく、武夫にも劣らぬ働きあるは、あはれ、武人の子女たるに恥ぢざるのみかは、世の女子たるもの、鑑ともなるべき行にこそ、

家政

看護法捷徑（三十）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（二）耳病

一耳病も、亦、眼病と同く、様々の症ありて、醫にわからざれは、知り難し。通常、耳の病と稱するものは、耳中に、耵聹、鬱積凝固するか、若くは綿、豆、又は、

小虫などの入りて、耳道を塞ぐに依りて、興るもの多し。此等の爲に、耳道塞がる、時は、耳鳴、又は、耳聾を興し、或は灼くが如く、刺すか如き、劇しき痛を興す事あり。

二耳中に入りたる、此等の異物を、取り除くには、極めて注意を要す。其故は、此等の異物は、皷膜とて、物を聽く爲に、最も、大切なる耳の器械の、直ぐ前の方に、多くは停り居るものなれど、之を取除かんとして、誤て、此皷膜を傷るの、恐れあるか故なり。若し、此ものを傷る時は、大に聽機を妨げ、甚しきは、其方の耳は、全く聾と爲る事あり。

三耳中の異物を取除くに、最も簡便なる法は、先づ硝子の注射器、(水鐵砲)に、微温湯を盛り、(決して、熱つきに過くべからず、)一方の手にて、耳輪を撮みて、強く後上方に牽き、他方の手に、微温湯を盛りたる注射器を取りて、一頓に劇しく、微温を耳内に注射すべし。但、此時注意して、注射器の嘴を、耳内に挿入すべからず。若し深く入る、時は、甚だ危險なり、此くする時は、注入したる微温の、再び流出るに沿ふて、多くは耳内の異物も、共に流れ出るなり。

四　耳内の異物、豆、又は麥粒、等なる時は、水に逢て膨るゝの性あり、故に、此等にありては、微温の代りに、油を用ゐるを良とす。

五　耳内に小虫入りて、出ざる時は、先、静かに、頭を反對の方に傾け、微に温めたる油を、耳内に滿る程、十分に注ぎ込むべし。然る時は、小虫は、自然に油の上に浮びて、自ら出べし。若し、又、夜中なれバ、先づ患者を暗處に居らしめ、急に燭火を取りて、耳前に持來す時は、其光を慕ひて、小虫自然に、耳内より出るあり。

六　右に述べし方の他、釵、或は匙、等にて、耳内の異物を除くには、静かに此等の器を、耳道の壁と異物との間に挿入して、搔き出すべし。但、此際は、極めて注意せざれバ、其器械の爲に、異物却て、益深入して、出易からず。或は器械、又は異物の爲に、鼓膜を毀傷するの恐あり、特に小兒などにありては、躁ぎ易きが故に、最も危險なり、注意すべし。

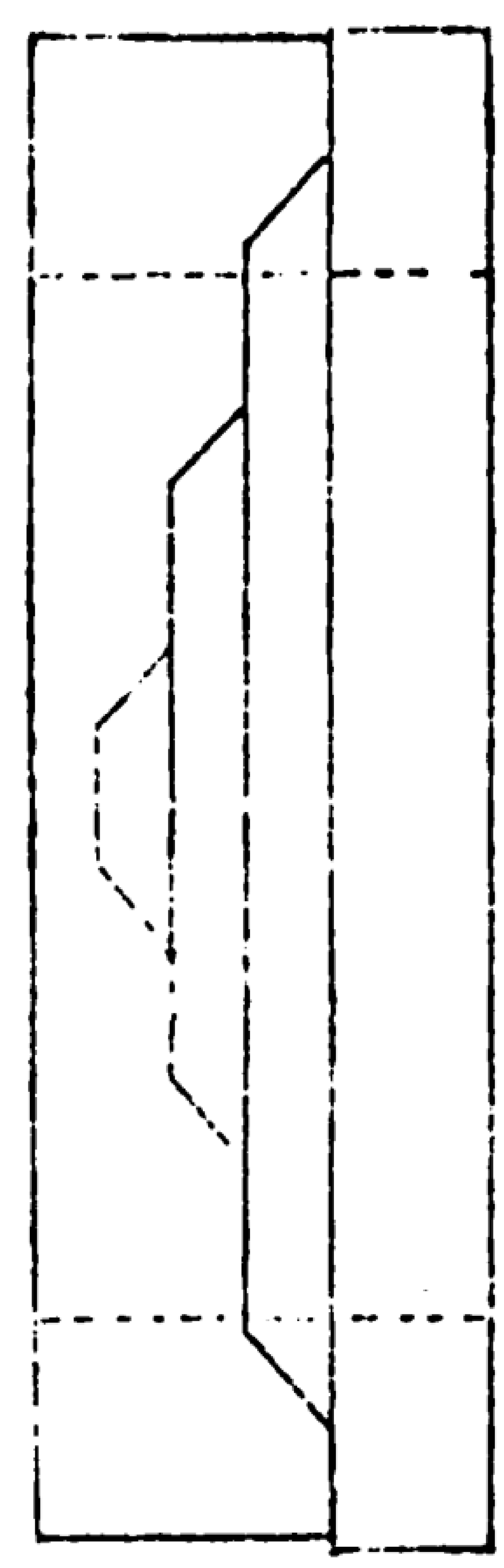
七　堆積したる耵聹、凝固して、耳中を塞ぐものは、先二三日間つゞきて、頻回微温湯を、耳中に注入し、凝固せるもの、漸次に軟化するを待て、徐かに取除くべし。

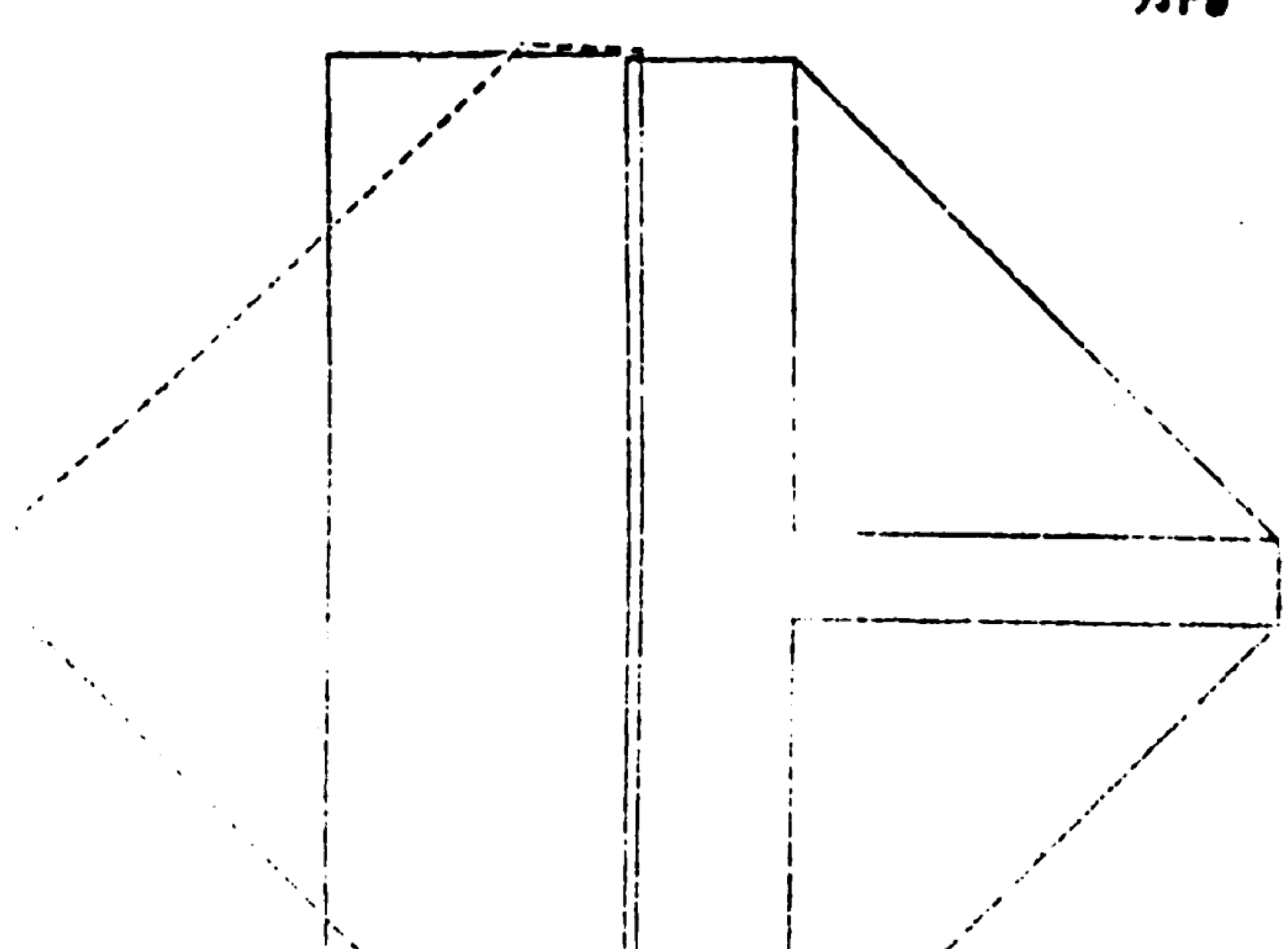
入以上の法を行ふも、異物出ざる時は、強て出さず、醫の診を乞ふべし。

有住齊

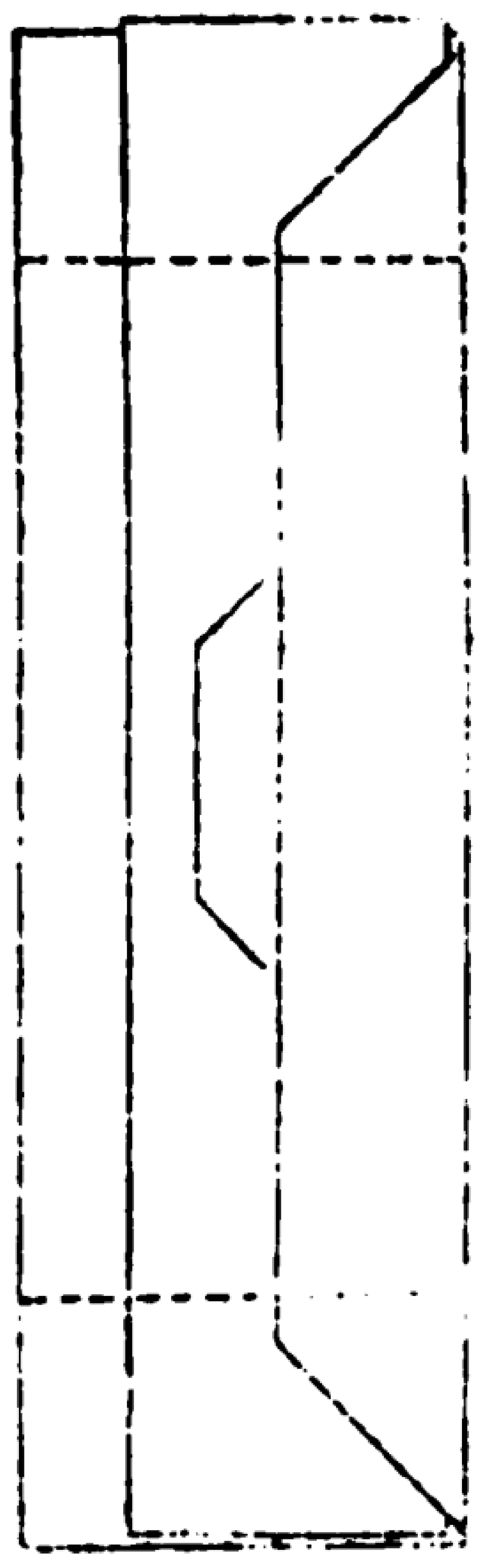
折形（七）

一眞草匂袋幷に薫物包　水引掛る、上書をする也、

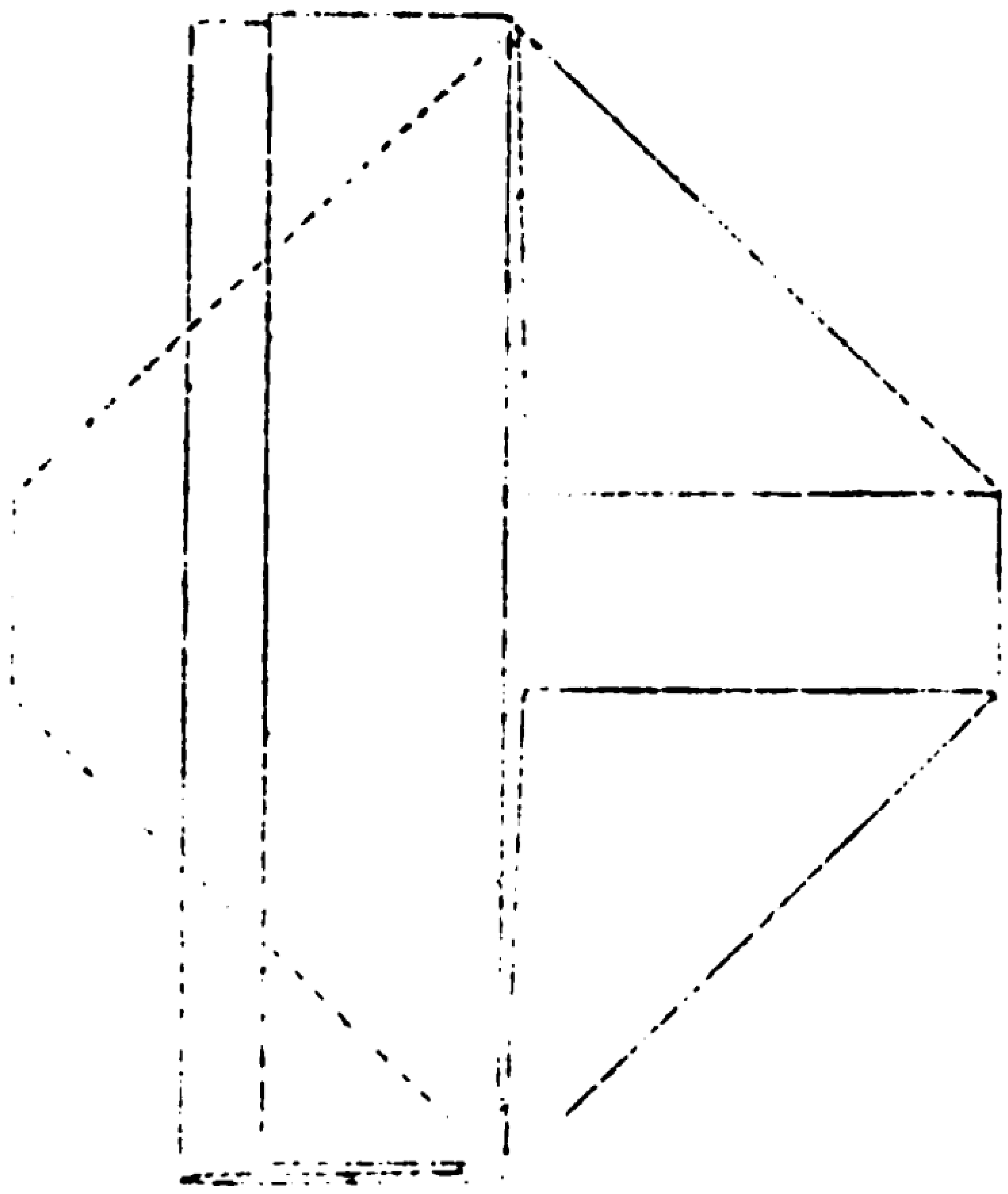




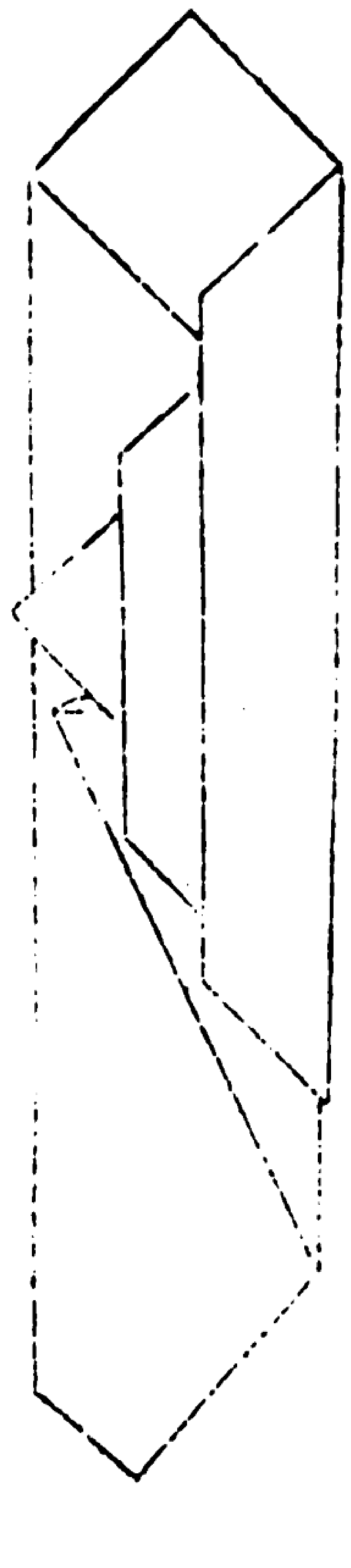
草匂



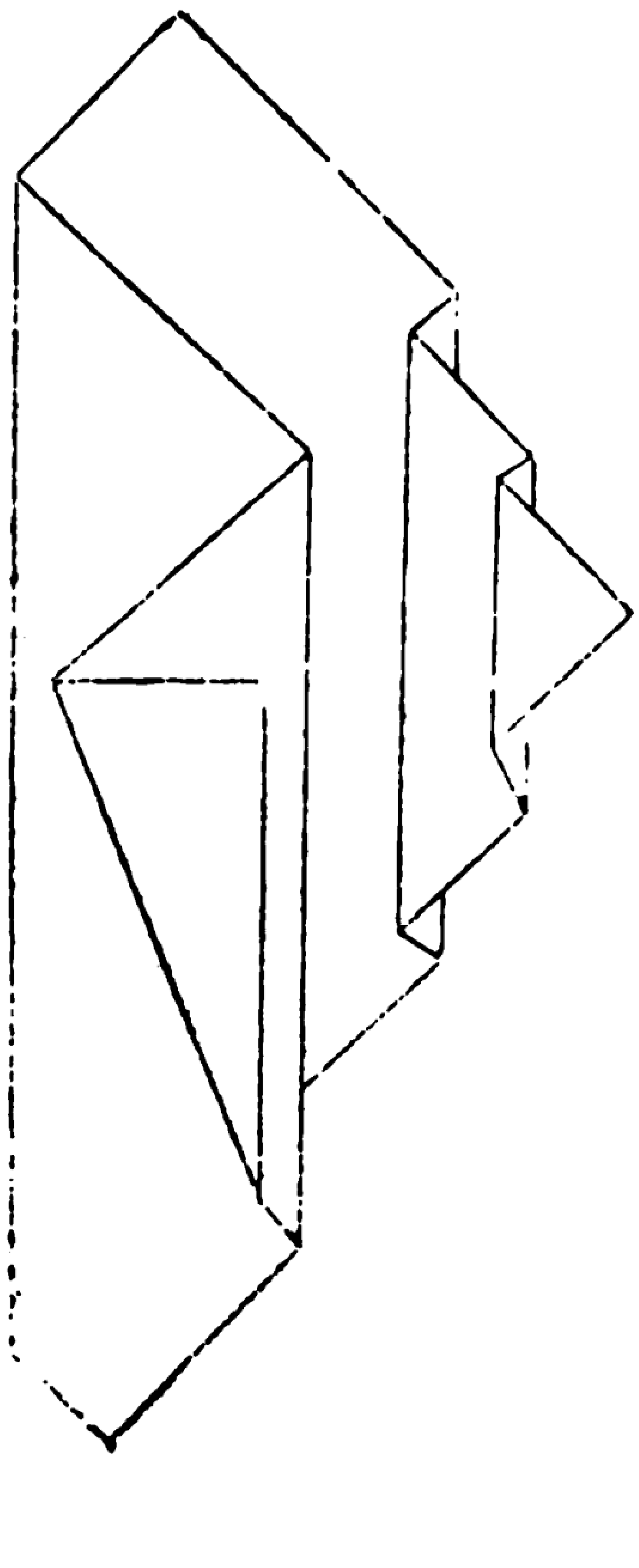
解



薫物

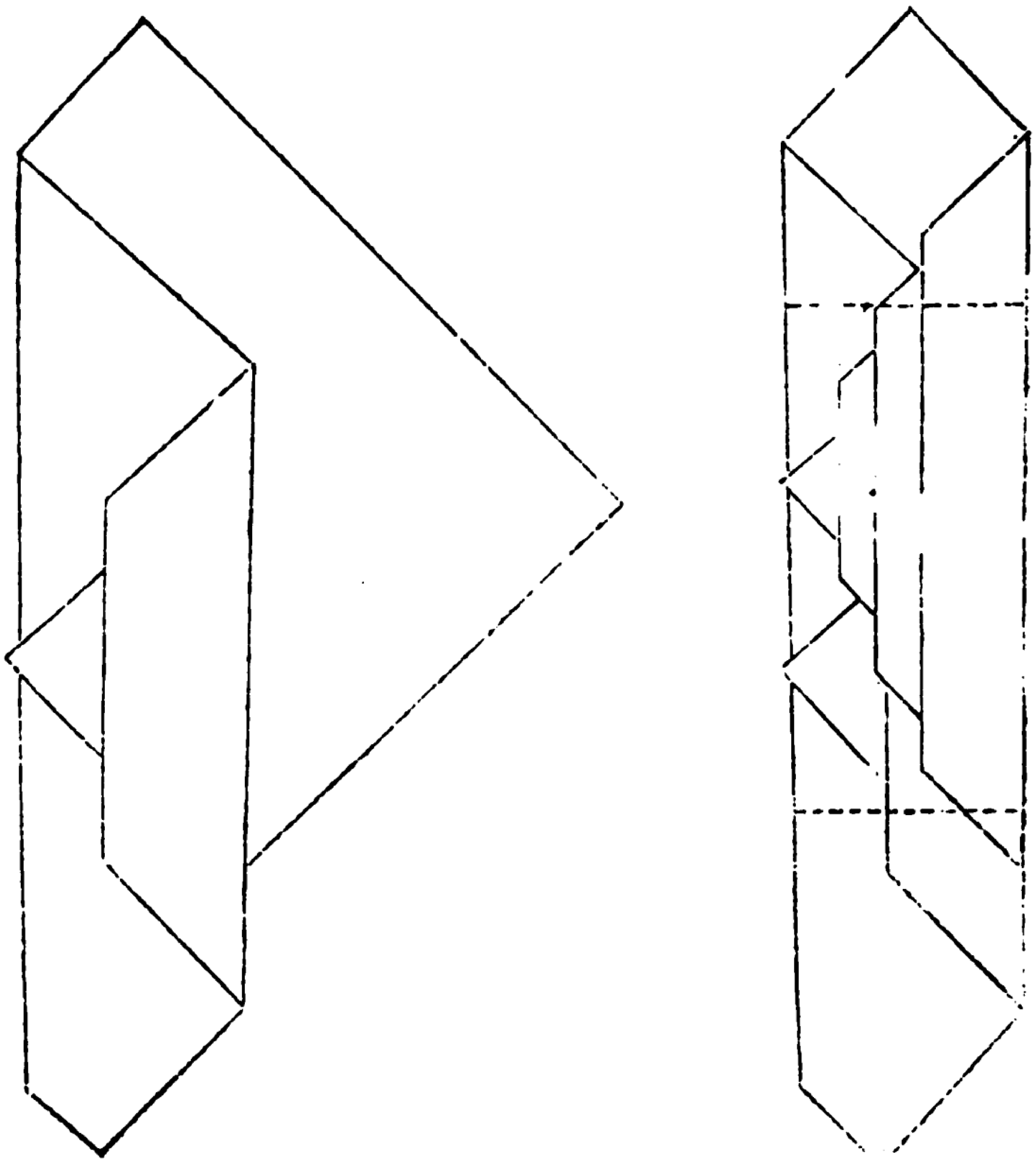


解



一琴琵琶糸包　書付水引あり、

解



學園

十六夜日記講義（二）

月池閑人

（一）むかし、かべの中より、もとめ出でたりけんふみの名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のことは、しらざりけりな。

みづぐきの岡のくず葉、かへすがへすも、かきおくあと、たしかなれども、かひなきものは、おやのいさめなり。

また、けんわうの、人をすてたまはぬまつりごとにもれ、ちゆうおんの、世をおもふなさけにもすてらるゝものは、かずならぬ身ひとつなりけり。と、おもひしりながら、また、さてしもあらで、なほ、このうれへこそ、やるかたなく、かなしけれ。

○壁の中より求め出でたる書。　孝經をいふ。　いにしへの支那の家の作りかたは、壁

を二重にして、其間に物を入れおゝこそなりき。魯の恭王、孔子の家を壊ちて、其壁の間にありし石函の中より、孝經を得たりといふ。故にかくいへり。○けん。すみたるこそを今より推しはかりていふ詞。○夢もかりも。少しも。いさゝかもといふに同じ。副詞なり。○身の上。自分の身にかゝりたる。○けりな。なほなげきの意をあらはすてにをは。「花の色はうつりにけりな、いたづらに我身まにふるながめせしまに、などあるなと同じ。

○みづぐき。岡の枕詞、又、筆のこと。○くず葉。宿根の蔓草なり。野山に多し。其葉の風にひるがへるさまを古より歌によめり。○ての條。古歌に、「水莖の岡のくず葉を吹かへし、阿知兒等がみえぬころかも。又、「かひなしと思ひな消ちそ、水やきのあとぞ千年のかたみなるべきなどあるによりてかけろなり。○かひなき。詮なき。○親のいさめ。親の教へ。いひつけ。

○けんわう。漢語にて文字は、賢王とかく、ケンノーとよむべし。才智すぐれ、徳高き天子。○ちゆうしん。漢語、忠臣とかく。眞心をもて天子に仕へまつる人。○かすならぬ身ひとつ。世の人にかぞへたてられぬからだ一つ。即ち、阿佛尼自身のこ

と。○さてしも。さては然ありて。しは助辭、意味なし。○かなしけれ。かなしといふに同じ。上にてそのてにをはある故にけれとむすびたるなり。

此條、四段よりなる。一は、しらざりけりなまでにて、爲氏卿の不孝なることをなげき、二は、いさめなりまでにて、爲家卿の遺言のむだになりしこと。三は、阿佛尼の世の人にすてられしなげき。四は、またさてしもより以下にて、上の三段をうけたる詞なり。このうれへは即ち、かの領地の事につきての心配にして、此書の精神のある所なり。故にうれへの下に、特更にてそのてにをはをおきて、其、意味の重きを知らせたり。そのうれへの趣は、なほ次の條に委しくのべたり。

大意、孝といふことを、今の世(阿佛尼の時代)の人は少しも知らぬ。實にあきれたる事なり。親、爲家卿の讓狀は慥にあれども、かく不孝の子ありて、親の遺言にたがふを見れど、親の敎へもやくにたゝぬものにてあり。猶、其上にも、夫にはをくれ、子はなは幼き女の身は、世間の人にも見すてらるゝものなり。併ながら家のことを思ひ、子の行く末を心配してみれば、このまゝには捨ておきがたし。かく不孝の子の爲に領地をかすめられしは、深く悲しきことなりとなり。蓋し、賢王云々とい

へるにつきて考ふれば、この領地の事を朝廷に訴へしかど、なにか故ありて、阿佛尼の負となり、なほ其地を爲氏卿の方につけられしなるべし。されど尼公は之に服せずして、更に、鎌倉に訴へんとは思ひしなるべし。故に、下文にも、「さてもなほ、あづまのかめのかゞみにうつさば、くもらぬかげもやあらはるゝ云々といへるなり。

(二)さらに、おもひつゞくれば、やまとうたの道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりとおもふ人もやあらん。

ひのもとの國に、あまのいはとひらけし時、よもの神たちの、かぐらのことばをはじめて、世をゝさめ物をやはらぐるなかだちとなりにける。とぞ、此道のひじりたちは、しるしおかれたりける。」

さてもまた、しふを、えらぶ人は、ためしおほかれど、ふたゝび勅をうけて、世々にきこえあげたるは、たぐひなほありがたくやありけん。」

うのあとにしも、たづさはりて、みたりのをのこゞ共、もゝちのうたのふるはぐぞもを、いかなるゑにかありけん。あづかりもたることとあれど、「道をたすけよ。子をはぐくめ。後の世をとへ。」とて、ふかきちぎりを、むすびおかれし細川のながれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あととふのりのともし火も、みちをまもり、家をたすけん親子のいのちも、諸共に、きえをあらそふ年月を經て、あやふく、心ぼそきものから、何として、つれなくけふまでは、ながらふらん。」

○あだなる。むだなる。○すさび。なぐさみ。○あまのいまと云々。むかし神代に天照大神、御弟の素戔嗚尊のあらび給ふを怒り給ひて、天の石窟にこもりましゝかば、世の中闇くなりき。諸の神之をうれび給ひて、石窟の前にくさ〴〵のものをかざり、音樂を奏せり。之神樂のはじめなり。大神、石窟の中にて、其聲をきゝてあやしくおぼしめし、磐戸をいさゝかひらきて見出したまひぬ。そのとき天上はじめて晴れて、互に相見ることを得たり。すなはち手をのべて、歌舞す。其をりとなへし詞

に「あはれ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」といひしとぞ。あまのいはとのひらけしときとは、この故事をいひ、こゝに神樂の詞とは「あはれ云々ととなへしことをいふにや。○此道のひじり。歌の上手なる人。○しるしおかれたり。そあるは古今和歌集の序に、「力をも入れずして天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり」などあるに依りていへるなるべし。

○しふ。漢語、集とかく。こゝにては、勅撰の和歌集のことなり。○ふたたび云々。前號四十九頁、五十頁幷に年表の條にいへるをみあはすべし。定家卿の新古今、新勅撰、爲家卿の續後撰、續古今を撰まれしことをいへるなり。○ありがたく。忝き意に用ゐたるにあらず。あること少き意なり。○そのあと。二度集を撰びし人の跡目。○たづさはる。關係する。○みたりのをのこゞ。二人のあやまりにや、阿佛尼のうみし子にて、家道をつぎしは、爲和爲守二人なり。他は出家などせり、前號の系圖みあはすべし。○うたのふるほぐ。爲家卿より傳へられし、歌書詠草などの事なり。○えにか。えは緣の音の轉。因緣、父子の緣などいふ緣なり、○道。歌のみち

なり。○はぐゝめ。そだてよ、○後の世。佛敎のことぞ。佛敎にては人の生れぬ以前を前世といひ、今活きてある間を現世、死して後を後世といふ。總稱して三世といひ、必ず生れかはるものなりといふ。後の世をとふとは、死にたる人の爲に、後世に、よき所に生るゝやうに、佛にいのるをいふ。○細川のながれ云々。細川庄を奪はれしをいふ。有のまゝにかきては優美ならぬ故に、かく詞をかへていひしなり。前の孝經のことをいひし條と、同じ詞づかひなり。地名を川といふにつきて、なかれといひ、せきとめられしとはいへるなり。○おとゝふは後世をとふらふなり。○法のともしび、佛壇にともす燈明をいふ。○物から。物にてありながらの意、東京の俗語なぞよいふから。と其意反對なり。此詞和文に往々用ゐる詞なり。よく注意して、其意味を心得おくべし。○つれなく。氣強く○なからへ。生きて世に長くある。大意、又、別に、よく考ふれば、和歌の道を、世の人には、はんとうのことは無くて、なんの、むだなぐさみのみなると、思ふ人が、或はあらう。俳しさやうのものにあらず。

むかし我大日本國に於て、天の岩戸がひらけしときに、四方の神達が、となへ給ひ

し神樂の詞をはじめして、今に至るまで、世の中をやすらかにし、物事ををだやかにするたすけとなりたりと、歌道の上手がいひをかれたり。されバ我國にては最も尊ぶべき事なり。

其上に、なは、勅命を奉りて、歌集を撰びし人は先例多きことながら、一生の間に二度までも、勅命を奉りて之を撰び、代々の天子に奏上したる事は、同じ事のまだ少きやうに思はるゝ。

(阿佛尼)自身は、どうした前世の因緣ありしか、かやうに、譽ある家にがしつきて、其跡目に關係し、三人の男の子供と、澤山の歌書とを、夫爲家のなくなりたる後、預りて持ちをれど、歌の道を輔けて盛にせよ、子を育てゝ家を興させよ、我後の世をとふらへ、と遺言して、其爲に讓りおかれし播磨國細川庄を、理由はなくして奪ひとられたり。夫故、家に財産なくして、今日明日の生活もえがたくして、佛壇の燈明も我等親子(阿佛、爲相、爲守)の命も、いづれも、どちらか先へ消えんとしながら、一年二年と年はすぎたり。かやうにあぶなく、賴み少く、かなしきものにてありながら、どのやうにして氣強今日まで生きのびたることかと、自身に、自身

のことが不思議におもはるゝ。かくまで、あはれなる境界なり。今は、（未完）

正誤、前號、年表紀元千九百四十年の條下、としは十六ぞかしの。との上。ことを脱す。
「四とせの春になりにけり」は前年、即ち千九百四十年の條下に入るべし。
一九〇一、の條下八二〇は、八、二〇。　一九三七の條下三十、十六、は三、十、十六。
同年の條下同二九。は　同、二九。　一九四二の條下四八　は　四、八。
右四ヶ條共に丶を脫す、

漫錄

美人論（承前）

萩廼家主人

今日我國の學者社會を通覽するに、其種類極て多く、一々枚擧するに暇あらず、されど、最も、その異なる者を擧くれど、三種に出でざるべし、曰、洋學者、曰、漢學者、曰、國學者、この三學者なるもの、各、其長短を研はし、互に相降らざるもの丶如し、されど、何れの學者を問はす、各、其信據す

る所に依て、我國の文明を企圖せんとするにあるや疑なからん、然るに、心を天外に置き、公平無私、以て之を判斷するに、皆、其弊害あるを免れざるもの丶如し、社會の進歩は、各個競爭の力によりて生ずるは、理の正に然る處なれど、互に其弊害あるを知らず、辯難攻擊をのみこれ事とし、何時か、我國の文明を見るに至らむ、
文明なる者、猶、美人の如し、されバ、文明を企圖せむと欲せバ、其をして文明に至らしむるの方法を講ずるは勿論なれども、其初に當り、古今の別と、內外の差を知らざるべからず、今の學者社會、果して之を知るか、予輩の見る處によれバ、外國學者漢洋學者は、內外の別を辯せざるが如く、國學者は、今古の差あるを知らざるが如し、何を以て美人の美たる、否、文明の文明たる所以を知るを得むや、
之を八百屋於七の容色に譬へんに、髮黑く長く、色白く櫻の如きは、我國の風土と習慣によりて、自ら定まれる美人の相なれど、萬古に度りて、決して、動かすべからず、猶、國躰と國教の如し、顏の丸きは、其世〳〵の人情によりて變換する者にして、或は長きを好みするをりもあらん、或は、丸きをめづる時もあらん、こは、猶、我國の政躰の如きか、疱瘡の痕うすくありは、猶、夫、我國上古樸質の如きか、然るに、新奇をよろこぶの徒は、惟、一古物を破棄するに汲々として、之を取捨するを知らず、たまには、我國の歷史を繙き、疱瘡の痕うすくあるを見出し、之を美人の相にあらざ

るの證となし、顏丸きをめづる時代をも知らず、遂には風土習慣より、おのづから定まれる、髮黑く色白きをも合せて、之を美人の相にあらずと云ふもの多し、美を美となさず、其醜、亦醜ならず、誰か公明正大なる美人論と云はむや、又、古を好みするの徒は、ひたぶるに、太古の風俗をのみ、これ慕ひ、嘗て進化の理あるを知らず、世の中を以て、漸漸退歩するものとのみ思ひ、美人を擇ぶも、皆法則を太古の美人に取り、其弊や大島田にあらざれば、美人の裝にあらず、丸顏にあらざれば美人の相にあらずと云ひ、甚だしきに至りては疱瘡の痕さへ笑靨視するに至る、醜を醜となさず、其美、亦、美ならず、誰か公明正大なる美人論と云はんや、予輩は、美人を擇せんには、古に偏せず、今に泥まず、古の美人に在ても、髮黑く色白きは、之を取らんとす、又、衛生法の行はるゝ今日に在ては、其厚薄多寡を論せず、疱瘡の痕のあるあらんには、之を厭棄せんのみ、又、何ぞ、髮黑く色白きを破棄するを爲さん、又、何ぞ、疱瘡の痕をよみするを爲さんや

評に曰、余嘗て美人譜を讀む、其一之容に云、螓首、杏唇、犀齒、酥乳、遠山眉、秋波、芙蓉臉、雲鬢、玉筍、荑指、楊柳腰、步々蓮、不肥不瘦、長短適宜と、二之韻に云、簾內、影蒼苔履迹、倚欄待月、斜抱雲和、歌餘舞倦時、嫣然巧笑、臨去秋波一轉、猧、三之技、四之事、五之居、六之候、七之飾、八之助、九之饌、十之趣、あり、甚、美人の標準を示したるものなり、凡そ綠眼と碧

眼とを論せず、此標準に合する者は、皆美人なり、何ぞ必しも碧眼を敬ひ、緑眼を卑しまん、事を論するは、須らく眞理を標準となすべし、何ぞ必しも洋學を敬ひ、漢學を卑しみ、國學を蔑にするの理あらんや、

又、日本の美人を擇ぶに、歐米諸國、或は、支那の美人、即ち、髪赤く縮れ る尻大きく足跛まろき、色黒き等を見て 直に、我國の美人に移さむとする者あり、甚だしき誤謬と云ふへし、前段已に論せしが如く、彼に在て美となすも我に在て美となすべがらさるものあり、其風土習慣の同じからざるものあれぞなり、然るに、風土の異なるあるも知らず、習慣のあるも覺らず、殊更に髪を赤くし、長きを縮らし、尻を大にし足を丸くし、皮膚を黒ふし、以て、天然の容色を損するが如き、何を以て美人となすに足らむや、假令、美人となすも、佛英米獨の美人のみ、亞弗利加、支那の美人のみ、我國の美人にはあらざるなり、我國よは、一種靄然たる美人の相あり、其さかや、芳山の花、富嶽の雪も啻ならず、かく云はゞ、反對者は必ず云はん、自分の田に水を引くと、されど、決して、自分の女房を賞歎する譯にもあらず、先年、米國前大統領、我國に渡來したるとき、王室の尊嚴、風俗の優美なるを見て、感歎止まざりしと、（民主國と君主國の大懸隔あるにも拘はらず）されたる、予輩の所謂、美人、否、大日本帝國の美人の相たる、彼の色男にも、さすがにわろくは見ゆさりしと思はる、然るに、學者社會動もすれば、其美の美

たる所以を忘れ、反て、之を破壞せむとするか如き、何ぞ其見の陋、かつ小なるや、

以上論ずる處は、一は、古今の差を知らざるに坐し、一は、内外の別を辨せざるの致し處にして、共に美人を論ずるに足らず、今や、我國明治初年の幼稚にあらず、學問に、工藝に、や丶見るべきものあるに至れり、されど、文明、否、美人を擇ばんとするも、か丶る暴論は中止し、更に、其本源に遡り、公明正大の議論を呈出し、以て世界無比の美人を付むこと、予輩の學者社會に向て企望にたへざる所なり、

されど洋學者の如き、漢學者の如き、其弊風を矯正するは、其人あるべし、又、其議論の行はれざるは、自、之を覺るの期あるべし、何にとなれど、色黒きは、我國の美人にあらず、足跡の丸きも、我國の美人にあらず、髮赤きも、尻の大なるも、我國人の好みする處にあらざれバなり、されど、こは、予輩の今日云はむと欲する所にあらず、予輩の同學諸君に望む所は、舊時の國學者の如く、色白く、櫻の如き、又、髮黒く長きの如き、決して動かすべからざる論據のあるあるにも拘はらず、之を愛するの餘、疱瘡の痕跡まで、はこりがに取出て顧みざるか如きことなからんを望むのみ、又、古書に、大島田とあり丸顏とあれバ、必ず大島田にて、丸顏にあらざれど、美人にあらずと云ふが如き僻言なからんを望むのみ、我必らず彼に勝るものにあらず、彼亦、必らず、我に劣るものにあらず、各、長短あるは免れざるところにして、こ

とに、百工技藝の如き、歐米諸國の最も長ずる所なり、之を美人に就て云は丶、衣服其他の裝束の如し、裝束なる者は、最も美人の品位を助くるものにして、其本質を毀損せざる限りは衛生經濟上、學理の動かすべからざるあらむには、洋服も可なり、束髮もよろし、眉も剃らぬに極めん、齒も染めぬに定めんのみ、又、何ぞ遲々するを要せむや、これ之を知らず、舊時の國學者は、往々、反對論者の非難の好資となり、これと同時に、世人の不信を取るに至れり、今日之を改ずんば、其言の美人論塲中に容れられざるのみならず、遂には、髮黑く長く、色白く、櫻の如き、美人の美質さへ、合せて之を破棄せらる丶に至らむか、戒めざるべけんや、愼まざるべけんや、

評に曰、天成麗質の美女と雖、衣服を飾らず毛髮を櫛らず紅粉を裝はず、唯、本性の美なるに依賴し、嘗て其品位を助くるの策を爲さゞれば、遂に都人夜宴の席を放たれて、田舍氏神祭の末座に列せずんば能はざるに至らんもあるべからず、好古の學者猛省せざるべからず、

さは云へ、美人の論たる、容易に決しうべき者とも思はれず、そは、十人よれば十心とか云へる如く、各、その人々に於て、異なるところあればなり、故に、今、予の美人と思惟する所も、諸君に於て同意なるや、否、知るべからず、又、我、國學社會にて、首つ丈ほれて居る美人も、他より見るときは、存外醜なるやも知るべからず、今、兩女の云ふ所をあけて、この論の局を結ばん、

ある醜の兩女あり、甲は天性の美人にして、一點の瑕瑾あることなし、乙は色黑く甚た醜しと雖ども、常に白粉を塗り、以て、外見を裝ふに巧みなりき、甲女乙女に向て曰く、子は天性醜なり、されど、白粉を塗り、以て、之を裝ふ、故に、吾は云はんとす、白粉別品なりと、乙女、忿然、之に答て曰く、子は美は美なり、されど、子の美は光線の力よるのみ、暗夜に在ては、誰か其美を知らむ、然らば則ち子は光線別品のみと、言終り揚々として去る、予の美人論なるもの、果して白粉別品なるか、はた、光線別品なるか、同學諸君の品定てをはんのみ、

美人論一篇、再三拜讀、立論公明、文章簡潔、敬服々々

廿年十月下澣　辱友太璞妄評

沖繩縣下旅行日記（五）

まよ〳〵庵主人

廿二日　照屋字坐兩名と、こゝかしこ遊びめぐる。番所の前、三四町隔りたるところに岡あり、二ッの社をおく、一は、千手觀音にして、一は、壽老人なり、宮はいづれも、石にて建てられ、佛體は陶製なり、壽老人の衣に、壽の字を圓形にかきて、ところ〴〵につけたるなど、何となく小兒の玩弄物めきたり。土地の人は、觀音を人の神といひ、壽老人を五穀の神といつき、月の初の日と、中の日とには、地頭代はじめ、當所吏員一同、關切の人

民を代表して、必ず、參拜すといふ。この國にて、壽老人を祭ることは、附會せる由緒などのあることにや、馬琴は、椿說弓張月に、この國を開きしといふ、阿摩彌久を福祿壽なりといへり。そはともあれ、この國を開きし人、その時代等については、別に拙考もあれど、旅行志をへて後、熟考の上、物すべし。座喜味村の西北に座喜味城といふあり。護佐丸が國頭の叛謀などあらむかと、その鎭壓のために建てしものなりといふ。中山北山一目に見わたされ、地のさまも、要害堅固なり、前方の城壁は二重なり、扉のなくなりし、門二重とも、もとのまゝに殘れり、もとの御殿かともおぼしき地に、竈神を祭れり。或はいふ、護佐丸の靈を祭れるなりと。その左手に藪あり、女神の由にて、男は參拜せず、若し已むを得ざる時は、晝にても、猶、炬をてらしてまゐるといふ。この國の風俗、女は。いたく男にあふを忌む、惟ふに、護佐丸夫人の住ひしあとにて、やがて、その靈を祭れるにはあらぬか。この城裏門なし、ぬけ穴より出入せしなりと、その穴これなりとて、指し示されたれど、今は、大石にて塞がれ、入ることかなはず。ザンパ岬にゆく、例の、旅の出立にうたはれたる名所なり。大凡四万坪ばかりの地、芝草に靑くつゝまれたり。東の方の斷崖の中ごろに、御神祭られたり。そこと並びて、三間ばかり隔り、昔の御神あり、そこには、辛うじて、馬と見なさるゝ石あり、これ即ち、神馬にて、金の鞍かけられしを、何時のころか、内地の人來りて、その鞍を奪ひ去れり、

今も猶、往來の舟人にて、禮拜するものもあれど、益なきことなり、既に、奪ひ去られたるものをと、土地の人は語りぬ、何者か内地の人を惡しざまよ云ひ聞せけるぞ、故意ならば、捨て置き難きことになむ、など拳固めらるゝこと、物狂はしけれ。原の眞中よりは、少し西に寄りたるところに、潮吹洞といふあり、入りて見しに五六間も下りたてば、廣きところあり、海までは、まだ、二三十間もあらむか、こゝよりは、足場なくて下ることならず、さて、この所より、海を見下したるところにては、さなから、周回二三町の池なり、池の中一面に、何といふ魚にか、三寸ばかりの數万群をなして、樂みあへるに、緑色の大なる魚來りては、驚かし誇りかなるざま、おのれ等が、まだ幼かりし頃、羅卒樣に出でおひて、分別ありとゆるされたる老人さへ、騷ぎまどひしこと、おもひ出されて、おはれなりき。西の端に、魚釣場あり、斷崖の中ごろに、アダミバーの根にて、足場をつくり、そこに眠りながら、足に釣竿を縛りつけおき、終夜樂をすと、危き世を渡るものもありけり。地震の豫報、何の憂とするに足らむ。宇坐村トキシ村、高志保村波平村を經て、番所に歸る、里程一里六七合(十勺を一合、十合を一里とするなり、一里は内地と大方同じかるべし、)宇坐村の出口に馬場あり、宇坐馬場ともいひ、又は、カタノー馬場ともいふ、トキシ村に、獅子を祭れり、頭は内地のと同じけれど、体は芭蕉の糸をつけたり、この舞人には、村中より月給をつかはすといふ、蓋し、お神をあつ

かふ人なるをもて、平常農事する折にても、肥料桶など、擔かせぬためなり。高志保村の村なかに、汚れはてゝ、緑色に作りたる溜池あり、その中にて童どもは、口のわたりまでさしかくして泳げり、くゞりいるなどさへありけり。元來この縣にては、風呂といふものなし、男は晝、女は夜月のあるころ、かうやうの溜池に來りて身体を洗ひ清むといふ、清むといふもをかしや。波平村の松原に、十八九ばかりの女四人、甘藷の根の掘たるを頭に戴かむばかりに、つくろひをへ、さて、傍の岡に腰かけて、何やらむ、歌うたひたるさま、あはれ、歌のためには、日の暮るゝも、何も忘れたゝめり、（この村の識方によりて考ふれば平波岬かと思はるれど）

廿三日　楚邊村の洞穴にゆく、番所より八合、洞穴は、村より南一町ばかりのところにあり。入口には、松の樹の七八尺の圍あらんと、キンビの樹の丈たかきとが並び立てり。穴をゆくこと、拾間ばかりにして、井に達す、即ち、これ、楚邊暗井なり、闊、一間半ばかり、井の左手、二三間の間、すきまありて、穴の如く見ゆれど、狹くして入るべからず。さて、この水は、楚邊村貳百五拾余家の、飲料水なるをもて、水吸みにとて、來る男女いと多し、試に、拾一時拾貳分より、貳拾貳分まで、來りしものを讀みしに、男三人、女十六人なりき。男どもは、穴の入口に桶うちおき、歌うたひなどして、休息してあり。やがて、女どもが、辛苦して持ち來つるものを、頭より奪ひおろして、おのが水桶にうつす、多くの中には、いざといひ

たけなる笑顔して、わざと奪はるゝもあり、奪はれじとすまひ、水桶を揺かされて、濡鼠となるもあり、少し老けたるは、罵りてゆく、總べてこれ、都人の、夢にも知らぬ、見苦しきさまなり。女のひたすら素直ならむには、如何なる痴ものなりとて、然やは悪戯はすべき、うちすまひあらがふよりこそ、いみじき玩弄物とはなりたるなれ。この村の女は、皆口喧しく、間切の人々より、楚邊鴉と名づけられたるものどもなりとぞ、似づかはしき、名よ、衣服さへ、黒き色なりけり。或人辨護して曰はく、こゝの村人とて、老ひたるはかゝるわざせじと、あはれ、いつの代に老ひたる人の、弱女にはなりしと、傍いたかりき、この喧騷には、目も注がず、雑巾やうの衣服を洗ひ居たる、年弱き一人こそ、いみじう打ちまもられしが、他所ならべ、ゆかしげだになからむに、大木原屋取を經て伊良皆村に出づる路傍の青草の上に、腹ばひながら、芋喰ひゐたる十八ばかりの女ども、余が帽子を見て、アレ小笠をかぶれるよと、ドット笑ふ、唾にまみれたる、芋屑を頬のあたりに、ひたと吐きつけられて、怒るなどもありけらし、さて、屋取とは、本村はなれて、かたまりあひたる民家をいふ、四五十軒あるなどさへも、又、この縣にては、別莊をもヤードイといふ、共に宿の義ならむか、

伊良皆村と、喜名村(番所所在の村)との間の道をピンザクといふ。ひろからぬに、両側に、松さへ立ちたれど、物さびしげなる道なり。老人にても、

夜の往來は快からぬ由なり。まして、幼きものなどは、名を聞きてだに、怖るといへり。昔は、ここに松の丈にひとしき怪物の、白き衣着たるが、出で、段々に丈ひくゝなり、遂には、かき消すごとく、行末知れずなりゆきゝといひ傳ふ、西手に小丘あり、小松繁りあへり、魔物丘といふ、そこにも、魔物すめり、これをさしむかひて、少し北かけたる岩のほとりには、幽靈出づ、蓋し、その、岩の中には、尾類(賤業婦)の死骸埋められたりと、幽靈が昔を忍びてにや、折々さまよひ出でて、歌をうたひ、人を驚かすなり。近き世、何某くれがし、確に見もし、聞きもしたりと。さて、こゝらの幽靈は、いかなるさまのものなるかと問ひしよ、着物の縞、夜目にも、明瞭に見えて、薄ドロに乘じ鼠色の尖袋に足をさしかれたる、[illegible]五郎的のものにあらず、歌ふ聲が、内地の幽靈の體の如く、上句は、いと明瞭に下句に爲りゆくほど、うすらぎて、うらみをひいて、いと長しとにもあらず、萬事御儉約につき、甚だ短しとも、定めかぬるものにて、直に、それと知らるゝとぞ、何地も同じ妖怪談、唯、同じからぬは、幽靈の出で樣、内地のは兩手をバ、項と胸との間にならべて、陰にひらき、髮ふりみだし、必ず、柳の下にて、その垂れたる枝と共に、兩手と髮とをうちゆるがせつゝ、うらめしいはといひて、體を少し横ざまにして、そろ／＼とさまよひそむるなり。こなたのは、松の下にても、杉の下にても、乃至荊棘の中にても、そのところにつきて、不足をい

はず、又、うらめしいはなどともいはず、生きたりし時だに、瓦對には住まれぬ庭の蘇鐵の丈高きは分限に應せぬなど、叱り馴らされしもの、まして、衣裝の贅澤などあらむやうなし、心のむきたる時は、即ち、兩手を兩耳のところより、高くさしあげ、舌をバ根かぎり出して、さて、兩手にて、下ざまに、空氣をかきなでながら、俯くまでのことにてよし、かたかりの支度ならバ貴とて憚なからむを、さすがに出でぬこそ、いとはしけれ。

ゆかしき人　　殘菊生

女は常に内にありて、廣く世に出でまじはらぬものなれど、貞女賢婦も、人にしられぬが、多し。德を修め、操を守り、家を齊ふるは、人に知られん事を求むるが爲に、なすわざならねど、德行の秀れたる人はかへりて聞えぬが多きものなり。されど、玉は衣につゝめども自ら其光あらはれ、黄金は土の中に埋もれども、遂に世にいづるならひ、常には、さる德行高き人とも無くて過ぎしも事あるときにのぞみ、思はず人に知らるゝもあるものなり。この頃いとゆかしき人の上を見いでたれど、いさゝか其由かきしるさん、

土佐の人加持雅澄氏　古言譯通の跋文にいふ、

『おほよそ、時にあひ花やかなる人も、思ひやりふかゝらずして、世にしのぶべきふしをなしおかずしては、たれかはなからむ後にかたりもつたふべき。いかにさかしだつきはも、すみやかにい

さぎよき名をとらむと、かまへてわがあるまじと思ふすぢのことを、ひたおもてにいさめあらそふときは、大かたの世にそねまれ、人のうらみをおひて、はて〳〵はよきことといひても人のしんせぬやうになりもてゆきて、そのいさをもたちがたきものぞかし。世の中のよろづの事、何かはしからぬ。

ふみつくり、歌よむすべの事も、物にかきあらはしおきて、後のためとなるべくつとめたることをば、のどやかに、心しづめてとり見む人の、はじめ、まのあたりきゝて、もどかしくめざましと思ひて、きゝもいれざりしことも、げにとうけひきしんぜらるゝことのあるならひなり。雅澄、をぢなけれど、この所にはやく心づきて、わかきほどより、年久しくよるひるの力をつくして、ふみをあらはすことをことゝせり。

しかるに、去年の冬ゆくりなく妻にわかれしことのかなしさは、さるものにておほやけごとのいとまには、老たる父、をさなき子どもをやしなふことのみにかゝづらふ身となりぬるを、もとより家まづしくて、ことをたすくるしもべだになければ、手づから、菜つみ、水くみなどして　月日をわたるに、今は、ふみ見、筆とるいとまのさらにあるべくもなし。しかはあれども、わが、つねに「ますらをは名をしたつべし。のちの世にきゝつぐ人もといふ古言をとなへをりしを、ありし世に妻がききよろこびて、夏の日のあつさもいはず、冬の夜のさむさもしらで、あしたゆふべの事とりまかな

ひつゝ、いさゝかも、わがこゝろざしのたゆみなからむことをたすけあへりし、ろのおもやうの今も見るやうにおぼゆれど、今はいとまなしとてかきさしたるものを、なほありてのち、つひに、しみのすみかとのみなしなど、人こそしらね、ありかよひつゝ見む魂の、いかにはいなく口をしきものに思はまし。いでや、わがたてたるこゝろざしのゆるびなきほどを、ありかよふたまも見よろこびてよと、それをせめての力にして、ほどほどきえぬべかりし心を、又さらにふるひおこして、よなかあかつきをいはず、いさゝかいこひぬべきほどをねんじて、はやくよりかきさしおきたる、何くれの巻々の下がきをとりいでたるその中に、この書はしも、うひまなびのともがらのためにとて、みしまえの玉江のこもを、かりにものして、あさはかに書すてたることのみにしあれど、ちりばひうせなむも、なでふことかはとおもふを、おりたちて、そこの心のふかさをもくみてしるべきたよりには、これをおきて何かは有べき。まづこの書をこそと、われにものとふふたりみたりが、こもだゝみ、かさねあむ數、かよひきて、いかでとくとそゝのかさることの切なるによりて、こたびかきあらためものしつるになむ。なほあだし巻々は、おひすがひにいたづきものせむとぞ。

天保八年丁酉八月十四日

從四位飛鳥井少將雅量朝臣八世孫

藤原雅澄識

この雅澄といひし人は、萬葉集古義といふ書を著

はして、有名なる學者なり、讀者が知らるゝが如く、萬葉集は今より一千有餘年以前に、成りたる和歌の集にて、其詞は、今の詞と異なれるのみならず、其書の成りしは平假名、片假名の未だ世になかりしときなれば、所謂萬葉がなにて記し、讀ことさへ、たやすからぬものなり、されば村上天皇の御代には。源順朝臣などよ命じて、其訓點を付けしめられ、鎌倉の時には、僧仙覺、其書の註釋を志るせり。されどなほ、足らはぬ事のみ多し。かの大日本史を著はされたる水戶の義公も此書の貴重なることに意をとゞめて、僧契冲をして、其註を著はさしめられたり、之に次ぎて、加茂眞淵翁畢生の精力を盡して、其書をときあかさんとし、萬葉考を著されしかど、事全く成るに至らざりき。其門人加藤千蔭、其志をつぎ、別に萬葉集略解をあらはせり。此書の註解は全部に及びたれども、名に略解といふが如く、大意をときたるまでにて、なほ深く至らぬ所もあるかとおもはる、されどなほ、幕府は其功を賞して、若干の白銀を與へしとぞ。

かく萬葉集を解釋せんとて、世ゝ多くの人の力をつくしゝにもかゝはらず、よく之を大成する人無かりしに、この雅澄氏は古義といふ書をあらはして、ほゞ大成せり、其功大なりといふべし、氏のなくなりて後、其遺稿を宮內省に上まつりしに近頃出板し給へり。著者の面目いかばかりぞや、其靈もあまがけりて、よろこばれたるなるべし。
さてこの雅澄といひし人の氣風をつたへ聞くに、

世事をかへりみず、ひたすら學問にのみ力をつくされしとか、土佐の三奇人の中にさへ數へられしといへど、其しわざの、世の常の人とは異りけんことおもひやるべし。家ももとより富めるといふにあらねど、召使もなかりしことは、前にもみえしが如し。

さる貧しきなかにて、よく舅につかへ、子をそだて、夫をして、學問に力をつくすことを得せしめ世に類まれなる大著述をなして、後の世にかたりつぐべき譽をのこさしめたる、其妻なりしひとの上の、いとゆかしく思はるゝかな。其名をも知らず、其親をも知らねど、庭のをしへのほども思ひやられて、親なりし人さへ、世に秀れたる徳ありけんと、かぎりなくゆかしきなり。幼子をのこして、夫にもさきだちしは、不幸なれども、果して其夫の大なる譽を殘し、後の世にかたりつぐべき名をなしたれば、其志はなりけるともいはん。其秀れたる徳行も、世に普く知られねども、かくしるし殘しされたる、夫の一言は、他人の爲に、一部の傳記をしるして、世にひろめられたるよりもよろこぼしきなるべし。衣のうちにつゝめる玉の光あらはるゝとは、かゝる事をやいふならん。なほ、委しきことを聞きて、長く世にかたりつたへて、今ゆくさきの世の人々のかゞみともせまほしくなん。

同じ土佐の人にきかまほしき事なり、

（完）

道のしをり歌あはせ（四）

久志本常幸寄贈

萩のつゆ萩のうはかせ見るめなき
　うらわの秋もたゞならぬかな
見はたせは花も紅葉もなかりけり
　うらのとまやのあきの夕ぐれ

物は、しひて、つくろひかざらす、おのづからなるさまこそ、ながめあかず、おもむきふかくおぼゆれ、あながちに、柳さくらをこきまぜて、春のにしきのあてやかなるは、めざましく思ひなされて、やがて見ざめするものぞかし、わきて、女のよそほひのはでに過たる、氣はひ、立ふるまひ、ものいひのかどがましくしなめくたぐひ、いとなつかしからず、さがなくいやしげになんおもはる、西行法師が嵯峨の大覺寺の庭に、巨勢の金岡がたてたる石を見て「庭のいしに、目だつる人もなからまし角あるさまにたてしおかねば」とぞよみける、物の上手のする事は、此ごとくすなはにして、わざとめかず、しかも、おのづからおくゆかしきものぞかし、なべてよろづの事ども、なにといふべき癖もなく、たゞ、やすらかにて、新奇をこのまざるぞよき、二條良基公の上臈のしよろうめくと、味噌のみそくさきは下品なりと、のたまひしは、をかしきたとへなれど、よろづみな然り、

年ふれどかわらぬ松をたのみてや
　かゝりそめけんいけの藤なみ
風ふけは玉ちる萩のしたつゆに

はかなくやどる野べの月かな

夫婦朋友のちぎりは、たれも初のうたのごとくにこそありたけれ、さるに、後のうたのさまなるもの丶、世にお丶かるぞうたてかりける、

さらぬだにおもきがうへのさよ衣
　わが妻ならぬつまなかさねそ

いづ方にひきはかるともあづさ弓
　もとのこ丶ろを忘れずもがな

をうなの道、さよ衣のいましめよりおもきはなしとは、たれしもいひしらざるはなけれども、ともすれバ、其恥をわすれ、あさましきおこなひをしいで丶、うき名をながすこそうたてけれ

君をおきてあだし心をわれもたバ
　すゑのまつやま浪もこえなむ

風ふけバおきつしらなみたつた山
　よはにや君がひとりこゆらむ

みさをのまもり、夫を思へるまこと、詞の外にあふれたり、貞女の心ざし、かうぞあらまほしきわざなりける、

かくバかりはげしき野べの秋風に
　折じとすまふをみなへしかな

春雨はふりしむれどもうくひすの
　聲はしをれぬ物にぞありける

節義のみち、命かぎりにまもり、いかなるうきふしにも、よくたへしのぶをこそ、誠の道とはいふべけれ、

風さへてあさ霜こふるたけの葉に
　ひとりのどけきうぐひすの聲

雲はみなはらひはてたる秋かぜを
　まつにのこして月をみるかな
はげしきによくたへ、うらみをとゞめざるさま、
いとゞめでたし、
あさか山影さへ見ゆるやまの井の
　あさき心はわれおもはなくに
いにしへの野中の淸水ぬるけれど
　もとのこゝろをしる人ぞくむ
人倫のまじらひは、かく心ざしふかく、たのも
しくてこそ、
よしの川よしや人こそつらからめ
　早くいひてしことはわすれじ
わすれじななにはの秋の夜半の空
　ことうらにすむつきは見るとも

よしの川のうたは、人たとひ我にそむくとも、我
は人にそむかじと、もろこし唐の陸贄がいひけ
る意なり、なにはの歌は、さるものはひゞにう
としのいましめになん、
九重にうつろひぬともきくのはな
　もとのまがきをおもひ忘るな
あしたづす澤邊に年はへぬれども
　こゝろは雲のうへにのみこそ
きくのうたは、幸を得て、位山たかくさりゆく
とも、心よむかしの境界をわするまじきいまし
め、あしたづのうたは、身は江湖のほとりにし
づめるも、心は魏闕のもとにありといふの義な
るべし、
しら雲の八重にかさなる遠にても

思はんひとにこゝろへだつな

もろともになれし雲井は忘れぬに
　月はわれをぞ玄らずがほなる

人のまじはり、いかなるうきしづみをへても、とことはにちぎりをかへず、初のうたのごとくならんこそ、たふとくめでたけれ、後のやうならんはいとにくし、

いにしへの春なわすれそさく桃の
　花の玄たかげみちはなくとも

この春もふる巣たづねてやま賤の
　宿をわすれぬつばくらめかな

仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心となん、人の盛衰存亡によりて、平生の好を疎にせんは、輕薄不入情の至り、いと淺ましく耻かしからずや、

おもひ出るをりたく柴の夕けふり
　むせぶもうれし忘れがた見に

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや
　ゆきふみはけて君を見んとは

ふるきよしみをわすれず、落ぶれたる境界を見すてず、かくなん賴母しうあるこそ、心ざしの誠あらはれて、こよなう嬉しけれ、菅家の御歌に「あはれわがうき時つるゝ友もなき人のなさけは世にありしはぞ」とよみたまへりしを、うち誦じぬれば、かの漢の翟公が一貴一賤交情の乃見といひけるに、おもひあはせていと悲し、

夜半にふくあらしにつれて思ふかな

みやこもかくや秋はかなしき
都だにさびしさまさる木がらしに
みねの松かせおもひこそやれ

人は、かく、かたみに思ひかはしてこそ、なさけふかく頼母しけれ、心ありし都の友も、山人となりて思へど、岩木なりけりのごときは、いかにつれなく、わびしきともがらなりけん、(つゞく)

藻鹽草（つゞき）

一てかけものと極めざる外に、わがめしつかひの女に、夫しのびて心あるなどは、大かた、見しらぬ躰にて過すべし。もし、はにあらはれて、此女を、妾にいたすべきなど〻、いひかけたらんは、いかにも、心能うけあひ、とりもちて心にまかすべし、是また、世にたぐひ多き事なり、これをいとひにくみても、せきとめかたき事なれば、いかにもおとなしく、夫の心にまかすべし、しのびたるも、忍ざるも、不實の心もちは前にいふが如く、これまた、朋輩のそねみ多きものなり、たきつけわきいづる事をふせぐべし。

一てかけもの〻たぐひ、はしたなき人にて、我に無禮ふつとめをいたし、夫の寵愛にほこりて、いろ〳〵あしきしかた、申分ありとも、隨分かんにんして、怒りの〻しる事あるべからず。その筋の人には、たとへわけのちがひたる事にても、りんき故と見ゆるなれば、氣のどくなる事なり、ぜひ不行跡不屈の事にて、家法もみだる

べきすぢの事などあらバ、言葉正しく、心おだやかにして、その過てる所をさとし敎ゆべし。とく心なきものに度々は無用なり、これも、こなたを正しくすれバ、大かた無禮もなきものなり。

一かよふのもの、緣付などいたさせんずる時は、我方樣にめしつかふものよりも、一入心をつけて、夫のこゝろに從ひ、猶、よくいたし遣すべし。其外日夜の事なれバ、しなく〳〵書つくすべからず。返すく〳〵も、りんきは、女の性にあるものとしりて、せぬものと極むべし。むねにたくはへず、心の内安からんこそ樂しけれ。

一夫はうらつにて、大酒を好み、短氣、氣隨、惡行多く、不幸不義の事あらんに、いかでしたが

ふべき、夫なりとても、みだりに共に惡事をとりもち、長じさすべきやうはなし、かやうの類は、つねに睦しくして、心にさかはぬ樣に、よりく〳〵いさめを入れべきすぢを工夫して、い、度もいさむべし、いさめやうは、和を元として、品多からず、一色つゝも善にあらたむるやう肝要なり。いかに孔子の道をとき、ふるなの辯をかるとも、おつと用ひざらんはせんなきことなり。いかにもきげんをとりて、のみこみ用ゆる樣に諫むべし。をさな子のわるさを、それそこなふなどいへど、いとゝそこなふに、手々がいたむものなりといへど、はなすが如く、總じて、親類、子かた、家來にても、ほむるは悅び、そしるは怒り、いけんはいやがるものにきはまり

て、初心なる内は、いさめを怒り、てうの行きたるは、一段よく言うけして、口上はいつはれども、こゝろには用ゐず、大かた、人のいさめを實に入るゝ人はすくなきものなれば、心を用ゐて、其人の能きゝ入べきすぢ了簡していさむべし、譽むるにほこらず、そしるを怒らず、諫めをいれて、わが非をしる人は、たのもしき事なり、是、人のうへのみにあらず、われもかくあらまほしきことなれば、人のいけんをいふ時は、誠に滿足して、能くもちゐきゝ入べし。

一めしつかふ人の心にいらぬ事ありとて、夫の聞まへ、客の前などにて、恥しめいかる事あるべからず。利發かましく是非をといてきかせがましくいふ事見苦しきものなり。いかにも、人のきかね所にて、そのあやまてるしなをいひ、とく心させて戒むべし。

一若き時は、めしつかふものも、主人ながら心安がり、もの問ひやすく、なれ過ぐる故、大かた無禮あり、おのが心まゝありて上下のみだれとなるなり。年よりたる人は、用捨をして、なさけを加へ、若輩には不便を加へて、をしへつかひ、中通りは、行儀をもとゝして、正しくめしつかふべし。年寄に申付る女は、すなほにてをとなしく、その身才覺ありて、偏執なき人の無欲ならんは、其任にかなひたる人なり。しかれども、左樣にそろひたるは、百人に一人もなきものなれど、大かたとし頃相應にをとなしき人を用ゆべし。あるひは、此家に由緒ありて、かし

らに立つべき人よし、年寄と立てそく人は、能もちゐそなへて、その役のゑかと立つやうに使ひかけべし、われにかはりて家事を見計らひ、若きものを引廻し、行儀作法それ／＼になすべきことをそをしへ、主人をうやまひ、下をそだて、我目に成べき人なれバ、つねに外よりも一際こころをつけ、人にもちゐさする樣にいたすべし、さわり迚、おごり心まゝに、われなくてはと思ふ樣に、あまり懇意すぎて、底を見すかされむ、若きうちは、主人の威かろく成て、また、下おさまらず、何事もてなたそたがへず、行儀よく、一重づゝは遠慮ある樣に致すべし、上よりの申つけ事、下よりの願事、みな、年寄の取次致すべき事なれバ、その筋道のたがわぬやうにつかふ事肝要なり、としバへの人、其器量うすく、若き人に才覺ありてはたらきつとむる共、年寄を外になし、若きものゝ物をいたさするやうに成りもて行む、下みだれて、年寄も用にたたず、若きものもおごり出來て、下おさまらず、苦勞になるなり、譬、としより不調法なる人なり共、その家のもとよりおとなしき人、もちゆべき人ならむ、隨分ろだて用立やうにつかふべし。わがえらび用ゐるには、成べきだけはその器をゑらぶべし。（つゞく）

紅蓮尼の石文　遠山操

紅蓮尼のことは、曾て、女鑑第四十一號に見えけるが、おのれ、去年の夏、松島へものし

つる折、その石ぶみを、或ものゝ本より寫しもてきつれバ、貴社に投じて、未見知らぬ人にしめす、

名も貫は敷紅蓮尼は、出羽國象潟の商人の子なり、父三十餘三所の觀世音を拜奉むとて、獨旅立ける、陸奥松島の掃部と云る者も同敷志にて、獨の旅なるに、ゆくりなく道の伴ひと成、いと懇に語ひ睦びつゝ、とかくする程に、志遂て白河の關にて別なとして、互に名殘惜みける時に、思はえず斯親み馴ぬるを、今遠く別なむ、又、逢事も知難し、君一人の男子もたりときく、我一人の娘もたゝ、願くは、こを配せて、永く好を結む事をといふ、掃部悦諾ひて、扨は我家に歸バ其子小太郎傾ひて、はか無成ぬとて、人々悲み合るに、夢現共ね

排ず、先だゝぬ心の闇にくれ迷ひて、日をへつゝ象潟に、未斯と告ざるに、幾程もなく、女を送りおこせたり、掃部おどろき、我子早くみまかり待き、さるを疾告ざりし意は、今はたいかにせむ、はかなき緣と思ひ、疾歸て、更に好男を見給へといふに、女痛くおどろき、打泣つゝとみにえ物も云ず、親々のゆるしゝ中は、未對面もえ賜らぬに、うせ給ぬ共、猶妹脊とこそ思侍れ、宿世拙きはいかにせむ、今よりは、唯、亡靈に事まつり命終るまで、徒し心をおもひ侍らじとて、いかに勸むれども聽ず、遂に止居て、舅姑にも孝を盡し、實々敷事世に類なし、斯しつゝ歲を經て、舅姑も無成にければ、圓福寺（松島の瑞巖圓福寺なり）の明極禪師の弟子と成、頭をおろして、名を紅蓮と改め、一向に法の行の

みにて、其世を終けり、先に、小太郎幼き時、常に觀世音の御堂の邊にて遊戯つゝ、手づから梅一本をなん植置たりし、うを此尼の亡つまの形見とみつゝ忍ひ、其側に庵して住けり、或時、其花の盛を見て、悲に堪ず「植置し花の主はそか無に軒端の梅は咲すともあれ」と讀けるに、又の年の春、此梅のみ花咲ず、尼、又「さけかしな今は主となかむべし軒端の梅の有むかぎりは」、是より春ごとに、元の如く花咲けりとなむ、今心月庵といひ、軒端の梅と云るが、猶、當時のを、作繼、植繼たるなり、又、其手すさみに、作りしせむべいと云る物、後に其名をおはせて、こうれむといひ、今もまねびて、人々もてはやし、圓福寺より、歳ごとに、國の守に獻る事、恒の例とはなれり、然あれとも、今は、其うせし年月も、其築の在かゝ、定かならず、世愈遠く隔りなは、踏嗣、聞嗣ぐ事もうせなむ事を憂て、江戸の宮下信敬、圓福寺の中方禪師に計り、石も記して、永く世に傳へむ事を願は、わな感たの志なり、わな悦むしのわざなり、

逢も見ず世に亡靈を妹背と思ひて花蓮
　身の盛ひと老にけるかな

惜らしき蓮の花は散ゝ物から類なき
　其香はわせし萬代までに

天保十四年三月　保田　光則誌

女畫師

乙羽庵主人

其七

獅子は牡丹の花陰に潜み、黄鶲は紅梅の枝頭に眠らむ、絶世の美人は如何なる處にか住まむ、別けて深閨に人となりたる宮女なんどの身は、翡翠の花の眉目美くしくし、髮長く色麗はしく、常に西施の鏡を愛して、粧臺の夢に愕き、絲竹の調べを聞きつゝ、簾外に行く春を悼みたりしも、戰國亂世といふ猛獸には、刃向ふ強の者も無く、哀れや殘菊に霜のかゝれる後に齊しくて、跡無き疇昔の榮華ぞ口惜しけれ。されバ若松城中に養はれたる女畫師の池旭も、土地は陸奥の果ながら、住めバ都にも優りて嬉しく、世の憂きことの時雨も知らで暮らせしが、月さへ盈つれバ雲に遮らるゝ習とて、人事に邪魔といふ物の絶えぬにや、仕ふる主君はしがも朝敵といふ汚名を蒙りて以來、引くに引かれぬ武士の意氣地に、六十餘州を敵となして、寸土一城の家來を賴み、戈を枕にして討死の覺悟を藩中に知らすれバ、固より譜代恩顧の忠臣、何でふ異議のあるべきや、死を侍の見榮にする潔白き所存の臍を見せけるに

ぞ、主君をはじめ家老の面々も一入喜び勇みて、敵この城を十重二十重に取卷けばとて、落すべきかはと堅くも堅く打守り居たりけり。

斯かれば、姿を花に譬へられ、容を月に擬はれたる女性も、御臺所が精悍しく陣頭に立出で給ふに附添ひまゐらせて、一同出陣なしたりけれど、萬目蕭條たる晩秋の孤營に、一番の春風花を吹くが如く、萬綠の叢中に一點の紅を浸すかとも疑はれて、優しさ麗はしさ、たゝふるに物も無かりし。

頓て名々城を出で、群り集る寄手の中へ、無二無三に斫て入り、長刀を水車の如く打振りて、風を切りつゝ進み行けど、竹を割るに齊しくて、隊伍は早くも亂れたり味方は此期を外すなと、指揮に一層勇を皷し、四五町あまりも深入なしぬ。

池旭も味方の勝に乘じて、後目もふらず進みつゝ、九合十合行き渡れど、腕撓みて躰疲れたり。こは如何せんと煩ふ處に、後邊の方より敵兵四五人進み來りぬ。いざや好き敵御座んなれ、會津侯の御内にさる者ありと聞えたる、旅薔師池旭が手練の長刀、筋骨持たぬ九州武士に見參せんと、云はねど物云ふ凉しき眼に、拮と四方を睨みつめ。寄らば斫らんと身構へたり。この見幕に小勢にては當り難しと思ひけ





ん、左右無くも寄り近づかず、筒先揃へて打放さんと、火蓋に手をばかけたりけり。
池旭も今は一生懸命、瞬ぎもせず打瞻れば、又もや寄り來る敵の兵卒二三十もかかりぞ近づきたり。後は刄前には鐵砲、進退こゝに谷まりて、更に詮術あらざれど、腰なる短刀引拔きて、既に覺悟の色見えぬ。
折からヒラリと近寄る敵兵、得たりと池旭に組み付けど、此所彼所より二三人、十人あまりも折り重なり、難なく生擒となしにけり。
池旭は無念さ口惜しさ、柳眉を逆立て憤れど、縛めの繩は鐵の如く、前後を圍む番卒は、これぞ今見る活地獄、午頭牛頭の鬼に引立てられ、敵の陣中に送られ、行く心の中こそ、屠所の羊も斯くやあらむ。
淚は湧けど拭ふに袖無く、髮は垂るれど掻くべくもあらず、衣に綾なす高手小手の結び目は、深くも肉に惱み入りて、手首は紫色に變じたり。繪に見しお七が引廻しも、斯く迄凄くは無かりけり。彼には犯せる罪科あり、妾にはさせる過失無し、敵となり味方となれるを憎みてならど、一思ひに殺すも可し、整じいに生擒して、妾に憂目を見するかと、歯を切りて恨み泣く。さるにても御臺様は御無事なるか、味

方の樣子聞きたやと、霞む眼を微に開きて、城ある方をうち見やれば、入り亂れたる亂軍ながら、一流の白旗を風に靡かして、隊伍靜に引揚ぐるは、あれ〳〵味方の女隊なりと、思はず一足踏み出せしを、下に居らうと叱られて、後邊を見るに繩卒が、青筋立てゝ怒りの顏色、恐やと徐と身震ひすれど、腕痛みて堪ね難ければ、顏を皺めて平伏せしに、兩手にからむ蔦蘿は、無殘や繋げる犬なりけり。

大將の御前なるぞ、搦人顏を上げよとの下知。池旭は恐る〳〵頭を擡げて、如何なる人ぞと見上ぐれば、黑吳絽の筒袖ズボンに身を固め、朱鞘の一刀を脊に負ひて、手には鐵扇を持ちたり、床几に端然と凭りかゝりて、拮と池旭を一瞥し、莞爾に微笑して後。搦人の繩解けよと云ふ、池旭は不思議と顏うち瞻れば、ジッとばかりに睨めつけられ、威嚴にうたれて思はず大地に平伏しぬ。

池旭は生ける心地も無けれど、つら〳〵四邊の摸樣を見るに、正面に陣幕を打めぐらして、大將其前に在り、左右には百人ばかりの兵卒ども、この本營をさし堅めて鐵砲の筒先を林の如く揃へ、吐嗟と云はゞ唯一擧と、用意いとも嚴かなり。時に大將の聲音と覺しく、耳下に百雷の如き響きをなして、其方姓名を何と申す。

花菖蒲

千稻子

其一

幾度か戰の巷驅け廻りて裂け破れたる鎧に、鮫鞘の太刀聢輿と括り、血煙浴びて色變つた黑髮額に亂し、弦斷れたる弓を杖に喘ぎ〳〵、谿間の巖にどつさともたれて太き溜息はつと吹き、湧き出る泉一口結むで、アヽ甘露と舌鳴らしヽ身が、今は重ねたる衾の上に兩足擲して他愛無く、海山の罕れ物限無く並べて片手よ酒波打つたる杯寸時も離さず、あたら鍛えし魂花に拔れて綿の如し。昔は片敷く鎧の袖に霜宿して、鳴き行く雁の一列見送りながら、故鄕戀しき涙ほろ〳〵と落しヽ身が、今は羽衣翩翩燒きしめし香の薫そよ風に吹して、月の哀れを三十一文字に託ち、兎の毛の筆より重き者めつたに持たぬ程の風流男と變りに變りぬ。アヽ三尺の太刀に稻妻散らした腕は鈍りて物の役にも立ず、胸に滿月を懸けて兵と放ちし勢は雲井に棚引く煙と消え、哀れや平家の運命は蜉蝣の旦夕に迫りしを悟らず。此頃は散り來る花瓣長袖

に受けて、艸葉に結ぶ白露に、しみ〴〵此世の墓無き事さへ覺ねて、蝴蝶の夢の何時迄も覺めざる愚さ。あはれ夜半に嵐の吹かぬ者か、樂しき眠の何時迄も續く者と思ひてか。

京洛には夜もすがら千燈万燈闇もなく、遠く見上ぐれバ時ならぬ焰ぱつと空に棚引きて、此處一所は晝もなく夜もわらぬ花の園。絶間無く立登る玲瓏たる糸竹の音は、飛び行く鳥の翼を留め、棚引く雲の足並抑えて、御日樣も暫しは此處に聞惚れ給ひ、月男も青白き光を澄し感に堪へ兼て呆れた顔なり。此處一歩踏み出した牡鹿鳴くなる嵯峨野の奥、さつと吹き來る秋風に千艸は左に右に波打ては、今迄月の影宿した白露は哀れ墓なく散りて、葉末に鳴くなる虫の聲を掠めて落ちぬ。壞れかゝりたる垣の廻りを尾花に拂はして茅葺の一軒屋、軒端に繁る忍艸は昔忍べとしたり顔まざわ〳〵と囀ぎ、其度に傾きたる軒はギチ〳〵と鳴にも心細し。後に竹群打續きて、風一度渡れも、互に揉合ふ婆沙たる聲に、秋は殊更身ま答へて涙繁し。

何者の馴の果か、憂世の塵を庭の芭蕉葉に拂はして、足らぬながらも其日々々は事無く送る母子只二人、母は五十の坂四ッ五ッ越えたれど、娘は今年十七八、飾らす

磨かねど、天性の美しさは包まれず、緑の黒髪房やかに脊を走つて地を撫んばかり、照る程の色艶に愛敬自ら溢れて、何處一ッ非點打つ所あらぬ面立なるが、如何にしけん此頃は兎角滞り勝よ、其愛らしき目元には絶えず霧を宿し、優しさ眉の境には晴れぬ心痛の兆を止めて、聢と結びし口を漏れて滾るゝ優しき言葉の絶えて聞えぬも訝かし。

夫も其筈、五六日前より母の容體何となく常ならず、今年の夏暑に當られて、がッかりと弱り、其後兎角思ふ樣ならねど、未だ床に就く程にあらざりしが、此頃の寒さ身に答へてかひたと枕に就きて頭上らず、老たる體の日に窶れ行けど、娘は片時も側離れず勞り慰め、三日に一度は遠き道を厭はず、藥求むとて露押し開き霜踏み分けて、疲も知らずいそ〳〵走り行き、歸り來ては枕邊に摺り寄りて脊を撫で摩り、態と笑を洩して可笑しき話に表は飾れど、心の底は煮返る程悲嘆の波荒く、顔他向けてそつと瞼の露拂ふ時は少からず。果は堪らではら〳〵と母の寢顔に熱き涙落して怪まるゝ事もありき。

窓を打つて降り來る雨に木の葉は枝を離れて散り行く夕暮、すや〳〵と休み給ふ隙

を窺つてそつと立ち、軒端に出でて遙に都の空打眺むれど、愈降り頻る雨を掠めて立登る霧は深く、邊りを閉して見ゆ可もあらず、胸に手を當て物思はしげに差し俯けど、軒場を傳ふ玉水ぱとつと落ちて襟を撫れど、アッと飛び上りて身震しながら、思はず見上げて莞爾笑ひしが、又首を垂れて眉を顰め、「此頃はどう爲れてか、若しや此寒さにどうか遊ばしてか、ヽヽヽ」力無氣に柱に身を寄せ掛けて、胸に餘る悲しみ包むに由なく、アーど、咽元押出す溜息二ッ三ッ、フト耳に入たる母の聲に氣付て走り入り、ひたと坐りて顏差し覗き、「母樣、御心持は如何で御座ります、今日のやうな雨氣に御當り爲るヽと御身の毒、よく御氣を御付け遊ばせ。」母は淋しき笑を凹みたる目元に寄せて其方の優しき看病はしみ／＼骨身に答へて忘れは置ぬぞや、アヽヽ今日は大きに氣分も能きやうなれど、最早起上るに程もあるまじ、其方も余り心痛めて煩はぬやうにしてお呉よ、又口元押拭ひて菖蒲や、此頃知章樣はどうなされてか少しも御運びなきがヽヽヽ」「されど、若しどうがなされはせぬかとヽヽヽ」「時ならぬ此寒さには健康な人も、堪へ兼ぬればヽヽヽアノ菖蒲や、夢は逆とかいへば氣に掛るには及ばねど、今少し間眠みし間に思はぬ夢を見てヽヽ菖蒲は胸ぎつくり

と衝れて思はず膝摺り寄せ、「エヽ思はぬ夢とは、どんなヽヽヽ」愁く顔つく〴〵と打眺めそんなに、愁くには及ばぬ事、夢は當にならぬ者、其上死んだ夢などはその方の健康な兆とか云ふ事なればヽヽヽ」「それではアノ死ヽヽヽどなたか隱れ給ひし夢を御覽遊ばしてか、其は何處の何方がヽヽヽ」「サア其の夢はヽヽヽ知章樣の隱れ給ひしヽヽヽ」エヽと暫し呆れた饒物も曰はず、やがて全身前に投げてガバツと俯せむ、母はムツと頭擡げ、枕片手に跳ね除けて怒の聲荒げ、「夢ぢや〳〵エヽ夢に愁くやうな不甲斐なき娘は持ぬ、今こそ落魄たれ昔は越中守藤原信昌とて歷とした武士の娘でなきか、幼き時より心を締めて此母が敎へ諭した娘にそんな愚な者は無き筈。よく聞けよコレ菖蒲、今都にては平家の方ピ、鎧甲の緒を切つて唐櫃に投げ込み、日に酒の息吹いて眠り給へど、一足踏み出した國々には、腕を摩つて怨を噛む源氏の族數知れず、心は一時も安からぬ世の樣を、早くも見て取り給ひしは只知章樣ばかり、年その未だ若くませ御心の雄々しさは御一族の內にもや肩双べ給ふ方もあるまじ、されむ一旦不幸にも戰破れた時は、潔く討死遊す程の御覺悟あるは知れた事、若し眞に夫の討死ある時、其方の此樣にてはどんなに取亂す事やら、今より思ひ遣れて

しみ〳〵悲しく口惜し、若し夫の名を汚し父母の名落す事もあらむ如何にせん、コレ菖蒲、母が、云ふ言聞き分けて今より心根確と持直さばよし、めつたな事させむ此母は許さぬぞよ。」病の身も忘れて膝立て直し、兩眼に露を宿してじり〳〵と摺り寄りはつたと睨めむ、涙は窶れたる膝の上にはら〳〵と散れり。母の意見骨をゑぐりて全身に浸み渡り、思はず五體震はして二膝三膝其側と離れ、ひたりと頸を垂れて片手に握き來る涙を受け、「難有御意見身に浸みて忘れは仕りませぬ、此後はかよはき心取直しますれば、見惡く取亂したる今日の樣はどうぞ御許し下さりませ、」途切れ〳〵涙と共に述べて霧に霞む目に見上れば、母は嬉しげに莞爾笑ひ、「オヽよくいやつた、夫でこそ誠に我娘、母の心も落付た。サア此處へ來て足でも擦つてお呉、」心も解けて又すや〳〵と眠り給ふ母の顏つく〳〵と見奉れば、アヽ思ひしよりも窶れ給へり。頰に肉落ちて色いたく青醒め給ひ、優しかりし昔の御影はそのあたりに宿るやら、只目元に殘る無限の微笑は朝夕撫て慈み給ひし昔に變る事なけれど、口元洩れ來る優しき御言葉は今も昔に變らねど、此二三日の御樣子にては若しもの事ありはせぬかと、若し悲しき事の起りもせば我身は何とすべき、其上少くも二日に

一度は御越ある知章様も此六七日はどうなされてか少しも見え給はず。夫につけ母様の御夢、御叱りは受けしものゝどうも心に懸りて忘られず、深き思の淵瀬を潜りて彼此れ考へ廻せば、悲しさはしみ〴〵身に逼りて心は麻糸の千々に亂れ、涙は胸を擾き上げて瞼の露自から散れり。堪り兼て兩袖顔に押當て、差俯きて人心地なく萎れ伏しぬ。

日はぱつたりと暮れて、後の竹藪に雀の聲も収れぬ、木葉を叩く雨の音心細く聞えて、入相の鐘は雨を掠めて力無く響けり。折しも門の邊に馬の嘶く聲俄に聞えぬ。若しやと顔を擡げて耳欹れぬ、確に折戸押開る人の氣色、さてはと嬉しさに躁ぐ胸抑えて母の目覺め給はぬやうそつと立出で、燈火片手にすかし見れば、雨の中に知章は莞爾笑ひて立居れり、身には萩の花摺の狩衣に紫の奴袴打着て、暗にもしるき黄金造の太刀横へ、今日は殊更華やかに見えぬ。菖蒲は覺えず小足に走り寄れば、サッとあをり來る風にあはれ燈火は吹き消されて一寸先は暗と變りぬ。

文林

早春海　近衛　忠熙

海こしの山もかすみて春のいろ
たちかへりたる袖のそらなみ

山家友　東久世通禧

見るふみもむかふ硯もわりながら
みやこの友をまつかげのいは

早春海　佐々木高行

風はまたみにしみなから海はらは
長閑になりぬかすみ初めつゝ

前田　利嗣

梓ゆみはるきにけらしわたつ海の
波ちはのかにけさはかすめる

高崎　正風

ふじのねの雪の影こそ消にけれ
かすみやたてるたごの浦なみ

前田　利鬯

船にたくけふりよりこそ霞みけれ
春たちそむるまながはのおき

黒川　眞頼

春といへど庭も靜けしおはうみの
あらき心もあらたまりけむ

新年山　諏訪　忠元

新玉のとしのひかりにいたゞきの
ゆきもさやけき富士の芝やま

早春海　植松 有經

をとめ子が袖の浦なみうら〳〵と
かすみ渡りてはるはきにけり　內藤 存守

袖の浦のひゝに懸れる海苔の色も
更に青みてはるたちにけり　松浦 辰男

竹のつゑの贊

月ゆきのあした夕へにつきそひて
行手はなれぬともはこのきみ　師岡 正胤

日出山

旗雲は四方になびきて日のみかけ
かゝやきのぼるたか御座やま　片岡 正占

朝鶯

朝ことにふしはもおろく成にけり

竹をねくらのうくひすのこえゝ　森 馬太

千倉百首の中に

安房海や滿干はいつと知れねども
うちよする音の高くもあるかな　佐々 豊水

富田信高の妻

眞木柱うごかぬこゝろあらはれぬ
片かまやりのはさきするどき　前田 朗子

早春海

はる霞たなびきそめしうなぞらは
波のたちゐものどけかりけり　小池 道子

大御船かへりきまさむ海むらの
波うちなきてはるたちにけり　西四辻えげる子

けふといへば大海原の浪までも
かすみ渡りてはるたちにけり
鶴　久子

大船のほかげはるかにかすみけり
波の千里にはるやたつらん
中島　歌子

おり立て貝ひろはむはいつならむ
春まださむき袖のうらかせ

新年宴會
あたらしき年のはじめのほき酒に
御代の恵をくみかはすなり
諏訪　晴子

梅花先春
雪のうちにはなの心もとけ初めて
春のこなたににほふうめか香
三輪田眞佐子

春氷
これもまた冬のかたみと手に取ば
やがてとけゆく春のうすら氷
師岡須賀子

梅花先春
いとはやもほゝゑむ梅は君が世の
春をむかふるすがたなるらん
河野　文子

新年祝といふことをよめる歌并短歌
梅上壽子

新玉のとしたつ今朝は　現身の人とのことゝ
豊御酒を神にさゝげて　君が代を千世と言賀ぎ
己が世を五百世と祝ひ　祝かもほ賀かもすらし
さす竹のみやこ少女は　打むれて少女さびすと
手鞠つき毬うたうたひ　あまざかるひなの童は

打つどひ舞さびすど 古事をかたらひかはし
己もく思ふ事なく あそびすらしも

短歌

年立てよそへるきぬのうらやすき
御代のさかえをいはふけふ哉

笑門福來といふことを

師岡 須賀子

世にいひはやすざれ言の多きも、一として、その根元のいはれなきはわらざるべし。笑ふ門に福來るといふことも、よしある事なるべし。今、こゝろみに言はむ。そは、いとかしこかれど、神代に、天照大御神、みいかりまして、天の岩室にこもりましゝかぞ、世界、とこよゆくあしき事のみになりぬ。その時、八百萬神たち、安の河原に集ひ、ことはかりて、天の宇受賣神をして、岩屋戸の前にて、神樂をせさせ玉ひき。そのさま、いとくすしく、妙なるにより、諸の神たち、ともに笑ひて、高天原ゆすりたり。この時、大御神、岩屋戸を、細目にあけて、ものとひ給ふを、手力雄神、御手をとりて引出し奉り、世の中、明になり、まかこと、のぞこりて、よきことのいできぬ、と古き史にもしるしありときゝつ。されど、わらふ門まかまかといへるざれ言も、この古事をもとゝして、言ひいでたるにはあらじかと思へど、いかゞあらむ。かくいふこと拙しと、人々のわらひたまはゞ、我が門に、福の來たらむもはかられずと、獨ゑみつゝ、一ことかくなむ。

雜報

●歌御會始　この月十八日、御例の通、歌御會始せさせ給へり。

御製

春風もふくこゝちしてあらたまの
としの初日ににほふうめかな

皇后陛下御歌

さしのほるあさ日のとけき大庭に
春もまちあへすにほふ梅かな

大勲位　晃親王

よの春をまたで早くも咲きにけり
雲井のにはのうめのはつはな

宮内大臣従二位勲一等子爵臣　源朝臣久元上

すゝみゆく御代にならひて梅の花
春をもまたすさきにほひけり

侍従長兼内大臣正二位勲一等侯爵臣　藤原朝臣實則上

あら玉のとしのはつ日に咲き匂ふ
梅ははるにもかはらさりけり

講頌　従一位勲二等臣　藤原朝臣實徳上

のとかなる雲井の庭のうめのはな
春をもまたてほころひにけり

式部長従二位勲二等侯爵臣　藤原朝臣直大上

新玉のとしたつやかて咲にけり
春をもまたぬうめのはつはな

皇太后宮大夫従三位勲二等子爵臣　平朝臣孫七郎上

鶯のつはさこぼれるゆきのうちに
春をもまたてうめのはなさく

皇后宮大夫従三位勲二等子爵臣　源朝臣敬三上

梓弓はるたつそらにさきかけて

さくか御園のうめのはつはな
題者點者　御歌所長宮中顧問官從三位勳三等　男爵臣　藤原朝臣正風上

雪のうちにさきたる梅も春風の
ふくを待てやよにかをるらん
奉行　御歌所參候正三位勳四等　伯爵臣　源朝臣詮上

春風のふくをまたてもにほふかな
としのたちえの梅のはつはな
讀師　御歌所參候非職侍從從二位勳六等　伯爵臣　藤原朝臣公允上

御園生の風はまたさに春めきて
としのはじめに匂ふうめが香
奉行　御歌所參候從三位　伯爵臣　藤原朝臣爲紀上

のどかなる年の初めと冬ながら
御國のうめはほころびにけり
講頌　從二位伯爵臣源朝臣重朝上

大御代のゆたけき年はたちにきと
御園のうめはふゆこもりせす
講師　子爵臣藤原朝臣隨光上

吹く風のさむさもしらす大にはに
さきいてにけり梅のはつはな
講頌　御歌所參候雅樂副長從三位　子爵臣藤原朝臣基正上

うめの花はるより先ににほはすは
年のはしめになにをかさゝん
發聲　御歌所參候侍從從三位勳六等　子爵臣源朝臣有良上

新玉のとしのはしめにうめのはな
かをれは春のこゝちこそすれ
講頌　從四位男爵臣物部連有卿上

春またてほゝえむ梅はきみか代の
年のはしめに逢ふやうれしき
預撰　權掌侍從六位大職以登子上

春風もまたふきそめぬ大にはの
いつこなるらん梅の香そする
東京府士族佐々木濱子上

はるまたてほゝえむ梅は君か代の
年のはしめやうれしかるらん
三重縣士族宇佐美祐次上

大御代のめぐみをうけて咲く梅は
春のひかりもたのまさりけり

廣島縣士族長尾尚六上

おくれぬをおは御心とみそのふの
　梅ははるひをまちて咲くらん
廣島縣士族松元時直上

梅の花はるよりさきにさきいてゝ
　ひとりのとけき香に匂ひつゝ
京都府平民山添直治郎上

いさをりてをかめにさゝん梅の花
　あとに春まつえたもありけり

●棚橋絢子ぬしの談話　こは、去る一月八日、女子成立學校授業始のをり、談話せらしものなり。

今日は、新年の御祝義を申、相變らず、皆さんに、御目に掛り、實に目出度事と存じます、就ては、何か目出度御話を致したいと思ひますが、斯と申す考へも出ませんから、例の相變らぬ下手な話を、

一寸致しませう、都て世の中は、日々變り行くが常で有まして、昨日は歳晩にて、風流人は、歳暮を惜むとか、年を守るとかを吟詠して、一年をむだに暮しゝを歎き、世間は騷々敷く、東西に奔走し、新年の儲けに暇なかりしも、一夜明れバ、さつぱりと、氣が變り、空の景色も長閑にみゆ、戶ごとに立る門松は、さながら、千代を籠て祝ひあふ、賀客の車〻、軒に並び、やれ羽根、やれ歌牌と、おのも〳〵の遊びをなし、日の暮れ、夜の明るも知らぬうち間に、はや七草も過ぎ、諸學校の授業も初まれバ、放任主義を徹却して、學業に從事する內、やがて、大試驗も來れど、首尾克級第して、卒業免狀を受け、親子諸共、螢雪の功の成りしを悅び、男子は世に出て、夫々職業に就き、

女子は嫁して妻となり、母となりて、又、子女を養育する等、日々進化せざるは有ません、かく變る世の中で有ますれど、相變りまして、御目出度とでも、申さねばならぬ處を、新年早々、人に逢へは、口癖の樣に、相變らず、相變らずと云ふのは、何いふ譯かと、思つて見ますと、是は外では有ません、只、誠の一つが變らぬを、願ふので有ませんと思ひます、語を換へて申ますれば、相變らず、進化變遷の天道に背かないで、世の中を、御渡りなされと云ふ事を、願ふのじやと思ひます、天に在りては、日月の盈虧、地に在りては、草木の榮枯、何れも、進化變遷の常道であると申事を示して居りますが、其間、始終、此、進化變遷、天道を日月草木が守つて居ると云ふ、誠はいつも相變らずで有ます、人間、有爲轉變の世の中に在りては、進化變遷を爲すが當りまへで有ますが、其中で、いつも變らず、其當りまへの順序につれ、無理非道の行ひをしないと云ふ誠を守りますが、眞に人たる道であらふと思ひます、此誠さへ變らなけれど、如何程、世の變化が有ましても、それは、驚くに足らぬ譯で有ますから、私は、相變らずの一言は、全く、此、誠の相變らぬを、願ふのであらふと思ふので有ます、然れば、人間は、何でも、此、進化變遷に連れて、其誠を失はぬ樣にするが、第一で有ます、兎角、世人は、欲の爲に、君家の迷惑を引起し、妻子の愛より、親子の親しみを忘れ、馴過て別のなきより、夫婦別れをなし、同胞の兄弟も、墻にせめぐ樣な憂を生じ、朋友利

を分つに、多く自ら取る樣な次第となり、終には、世に容れられぬ姿に、成行も有事なるが、先、此、間違もなく、相變らず、君家に忠義を盡し、親子團欒して、屠蘇汲みかはし、夫婦睦まじく、兄弟案を共にし、朋友の往復絶へず、益々、増進するは、皆、誠の變らぬしるしにて、甚だ喜ぶべき事なれば、誰も誰も、是を祝ふので有まして、聖人が、性に從ひ情をたむるを、學問の第一として、說れましたも、亦、此故でありませう、都て、人の生れつきは、皆善きもので有ますが、其天性を磨き出せば、善人君子となり、身をたて、名を後世にのこることが出來、耳目鼻口の情欲に引かさるれば、小人惡人となりて、一代身を立ることが出來ぬ故、此、耳目の欲を防ぐとて、伊川先生は、

視聽言動の箴を立てられました、其箴の中に、制之外、以安其內、克己復禮、久而誠矣、○閑邪存誠、非禮勿聽、○吉凶榮辱、惟其所召、傷易則誕、傷煩則支、己肆物忤、出悖來違、非法不道、欽哉訓辭、○哲人知幾、誠之思、志士勵行、守之於爲、順理則裕、從欲惟危、造次克念、戰兢自持、習與性成、聖賢同歸、と有ますが、是は、克己復禮、の誠を煉磨せしむるものにて、相變ります間だに、相變らぬ所を守る、よき戒めでござりますから、能く之を讀て、注意を加へ、克己勉勵せられたらは、當年の試業も、相變らず級弟して、故郷へ錦の、目出度好結果を御取りなさるのは、期して待

べき事と存じまして、新年早々より、相變らず、
之を願ふて置ます、

明治廿七年一月八日　棚橋絢子

●見苦しきもの　若き女の、ショールとかいふもの着たるなり。ショール着たる、あながちに見苦しといふにはあらず。その着ざまのわろくて、見るに堪へぬものあるが、いと見苦しきなり。今、こゝろみに、大路を見はたしね。道ゆく女の十が七八は、ショール着て行くめり。而して、その着ざまを見ね。車に乗りたる、はた、かちありきしたる、多くは、頸より、ショール着流して、顔の半まで包み、目ばかり出だせり。その見苦しさ、まことに、譬へんに物なき程なり。これ、淑德ある女に、決してあるまじきことにて、いと〳〵見苦しきさまなり。あはれ、姫達、ゆめ、かゝるさまして、世の笑を受けたまふな。

●吉村ヒデの好學　大和國式下郡唐古高等小學校第二學年の女生徒吉村ヒデ(十二)は、早く、父に別れて、母の養育を受けゝるが、天性、稽古を好み、遠き路をも厭はず、風雨降雪のをりとてもたゆみなく、一日の欠席だにせずして、學校に上りけり。されば、學業も、大に進歩し、校員も、大に、望みを屬し居りしに、先頃より、家事の都合ありとて、母親は、ヒデが、泣きて頼むをも容さで、退校せしめたれば、同校々長は、深く、之を惜しみたりしが、ヒデは、退校の後も、教科書を繙かぬ日とては、一日もなく、朝夕、母に請ひて、再、入學を容されよと、切に頼みけるゆゑ、

母親も、其の志に感じ、此の程より、又、入學せしめけれバ、ヒデは、大に喜び、勉强、先に異ならずといふ。實に感ずべきことにこそ。

●かな帖　は、かな書に巧なる岡田起作ぬしが、徒然草の一節を、いと美しう書きなされたる法帖なり。かな書に心ある孃達、つきて學び給はゞ、得らるゝところ少からざるべし。發所所は、神田柳原河岸普及社なり。

二月兼題

- 五日
  - 歌……若菜
  - 文……紀元節の記
- 廿日
  - 歌……水邊鶴
  - 文……勸學の文

かにかくに
ものは思はず
あさつゆの
我が身ひとつは
きみが
まに〱

（萬葉集）

教の庭

一月二十日兼題　社頭雪

天　京都府愛宕郡上加茂村　南大路正子

降りつもるいかきの雪に類へても
きよきは神のこゝろなりけん

地　愛媛縣新居郡玉津村　内藤清子

花と見て神やめづらんみやの名の
うめのこずゑに積もるしら雪

人　愛媛縣新居郡神郷村　永易幾野

降りつもるゆきに光をそへてけり
いかなる神のやしろなるらん

千はやふる神のめぐみのひろ前に
あやなくつもる今朝のしら雪　神田春子

稲荷やまふりつもりたる白ゆきに
あけの玉がきうづもれにけり　溝口秀子

（天地人のほかは原稿到着順なり）

さえ〳〵し嵐も絶えてふりつもる
雪しづかなる加茂のみやしろ　石井偕子

清らにもふりつむ雪のしらゆふを
かけわたしたる神のひろまへ　上野愛子

ふる雪をわが白ゆふとうちかけて
神のみまへにたてるまさか木　土生清子

さらでしもすが〳〵しきを神垣の
三笠のやまにゆきぞふりける　永井さい子

朝まだき雪のひかりにまうでけむ
あとさへのこる神のみまへに　國武すま子

白妙にゆきのつもれる三輪のやま
いづれか杉のこずゑなるらん　久保田律子

見わたせばたゞましろなり神垣は
さかきも杉もゆきにうもれて　鹽井ふう子

常盤なる松のいろさへましろなり
　み笠のやまにゆきふりしより　花山やすゑ

ちはやふる神の御前のまつが枝に
　去年のかたみの雪ぞのこれる　花山みさを

ふゆふかみふり積むゆきに住吉の
　岸のひめまつうづもれにけり　阿南圭子

五十鈴川つきぬながれを汲む人の
　そでにぞかゝる雪のしらゆふ　阿南巨子

稲荷山みつのやしろもしろたへに
　うづもれにけりけさのしら雪　河野文子

榊葉のはなとみるまでしらゆきの
　ふりかゝりたる神のひろまへ　松原鏡子

神山のさかきのこずゑたわむまで
　ゆきの白ゆふとりかけてけり　加藤きみ子

ゆきつもる小御門山のあけぼのに
　朝まうでせしひともありけり　澤田せい子

よもすからみ雪ふりけりみわの山
　しるしの杉もみわかぬまで　岡木庫子

みやの名の梅やさきしとおもふ哉　松田靜枝

　神のみにはのゆきのあけぼの

しら鳥の神のみかきにつむゆきを
　木綿のかゝると思ひけるかな　松田いし子

さかきともかきらて今朝は神垣の
　木毎にかゝるゆきのしらゆふ　藥師芳子

世をてらす神のみまへのみつ垣に
　つもりて雪もはえはありけり　南路大芳枝

神垣の木々のこずゑにふるゆきは
　はなさく春のこゝちこそすれ　渡邊ます子

千はやふるかみのいかきの榊葉に
　あやなくかゝる雪のしらゆふ　横山柳子

この朝けみ鈴ふる手もこほるまで
　春日のやまにゆきはふりけり　猿渡康子

五十枝さす神路の山のさかき葉に
　かゝると見えし雪のしらゆふ　宮川きよ子

しらゆきもふるのやしろの榊葉に
　積りてこそはさやけかりけれ　辻やす子

すみよしの松にかゝれるしら雪は
　神に手むけしぬさと見えたり　兼田敬子

千はやふる神のみむろに雪降れは　井上ちさと
こずゑの花とあやまたれけり

神かきの松につもれるしらゆきを　山河しゆん
さかきのゆふとおもひける哉

いそのかみ昔おほえてさやかにも　千日　文子
布留のやしろにつもる雪かな

千はやふる神のこゝろはひろ前よ　新沼すゑ子
ふりつむゆきの色に見ゆけり

いなりやまあけの玉がき白たへの　小野　秋子
雪のやしろとなりにけるかな

ちはやふる神の御園につむゆきは　水谷　清子
濁なきよの志るしなるらむ

未明より空はれわたりあさひこに　松田　孝子
かゝやくゆきのしらみねの宮

千はやふる神のやしろにつむ雪は　伊達富貴子
さやけき御代の印なるらん

たてまつるみてぐらならで皇神の　佐々有鄰子
やしろの松にかゝるしらゆき

八ひらでにちりにぞかゝれ神垣の　小橋　幸子
さかきの枝につもるしらゆき

偽をたゞすのもりのしらゆきは　佐藤　秋子
きよきみ神のこゝろなるらむ

御やしろの森のこずゑを吹く風に　平野　君子
ちりくるゆきを花かとぞ見る

ふみわけて御まへの雪に祈りてし　廣田とめ子
人のこゝろのあとはみえけり

玉垣のうへに降りつむしらゆきは、　尾崎なほ子
たむけの花と見るべかりけり

神山もゆきふりにけりひろまへの　黒田　登子
あけの玉がきしろくなるまで

一月二十日兼題

よろこばしきもの

天　千葉縣香取郡小御門村名古屋　澤田せい子

机の上の瓶にさしたる水仙の花さきたる都の友よりおこせたる福壽草ある人よりたのまれたることし終へたるもよろこびし八つ許りなる男子のいさましき水兵の服着たるが紙鳶もてはしりけるにぞ

か妹にやわらん五つむかりなる女子の松の飾に羽根のかゝりてとれじとて泣き居たるを見て兄の竿などもて來てとりてやりたる友愛の情わらはれて見る人の目にさへよろこばし春は空のけしきのどかにてうら／＼とあるに遠山の端に白雲のかゝれるごと山櫻のさける六月はかりあつさたへがたかりしに雨のあし横さまにふりきてはれぬと思ふ間もなく軒の玉水に月の影のやどりたる秋の紅葉冬の雪雪のうちの梅の花あさまだき戶をあくるに新聞紙の一ひらあるなど皆よろこばし遠く旅せし父君の恙なくかへり來給へるなどよろこばしからぬかは迎新年といへる題にて

稚子がとしよむゆびのかずますを
　みるわれさへぞ嬉しかりける

とよみ出てたまへる母きみのやさしき心の程こそよろこばしきものゝ限なるべけれ

地　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

うた合に勝えたるに後のつがひもまた勝ちたる遠き西洋あがしの港より郵便の文のこまかに所の景色など落つるくまなく筆に心をこめてかきつゞけたるくりかへしみるとき中垣のへだてなき友のもとより種々の物おこせたる中にみちの國紙などありけれど明日の詠草の料にせまほしくてよろこばし猫の兒うみたるは、鷹の鳥がりにえものゝおほきみるものゝきくものにつけて秋の空よりも夏それよりことに春の花かげにひさごかたぶみ君が代などうたひまよひかなづるあそびも又よろこばしうなん

人　府下神田區須田町　加藤きみ子

およそ此世に生きとし生けるものは何事につけてもよろこばしき時とまたかなしき時とあらぬはなしなべて人は私欲にみたさるゝが爲に不幸極まりなき時などは天を怨みて巳か身をつゆちりもかへりみることなく只一代の榮をのみ願ふははかなき事のかぎりにこそさても心は千々に思ひくだくもいさゝかだに其事に及むずされど人として喜怒哀樂の情なきはあらじ其が中にいとも喜ばしきは
のは冬の夜の寒さにうゑ凍ゆる人も多かれど父母

の恵にて餓もせず寒さも知らで安らかに過さるゝこそこよなき幸なれされど人の憂になやめるものあるははからざるまがつみにかゝりたる人などをいたはり恵む時の心地こそうれしき事のきはみなりけれこの世につきせぬ者の内よもひたすら仁の德に身をも心をも打入れてつゆだに遂たらましかばいまひときはまさりて喜ばしき事の限りとも思はましなど心にうつりゆくよしなし事をかきづゝりぬ

松原きやう子

凡世の中にはよろこばしき事おほかめれど皆一様ならず其人の心によりてよろこぶ處おの／＼ことなり人のめではやすなる月雪花にうかれつゝ身を安らかになす事を樂としてよろこぶものなれどそは一時の榮にていつまでかくてありなんやとこそ思ひやらるゝれおのれいやしき身にしあれど唯心に一つ遂げなんと思へるは正しき學の道にぞあるこれによりて心をみがき日々怠なくつとめはげみて五倫の道をわきまへ人のひとたる行にはぢさるやうたとひ世は大海のあらなみにうきしづみすともます／＼其身を正しうしてたゆまずうまずまことゝ忍耐との船にのりて此志を全う行ひて女の道をつくしたらんには此上なきよろこばしさの限ならずやいさゝか志のまゝに拙なき筆もて記すになむ

岡木　庫子

いまむかしの名だゝる書どもよみてあかぬ限なうわきまへたらんさこそとおぼゆれはたおのがたのもしとおもへる人のよくも事しをへて人にはめらるゝいはんかたなし兄弟姉妹のなからひいとむつまじう互にたすけあひつゝ物するを見てはおやおはぢの心のほどいかならん推しはかるだにうれしまいて上はかけまくもかしこき　兩陛下の御めぐみをいたゞき下は四千餘萬のはらからいとむつまじく豐さかのぼる朝日のごといや榮えにさかえ行なる此大み代にあひて何一つたらはぬ事なうあかしくらしつるわがともがらこそよろこばしとも た

のしともたとしへなくいとありがたきや

松田　靜枝

去年の睦月うまれし末の妹あり田鶴のよはひの壽ながかれよと父君は千代と名づけ玉ひぬあはれ取る年の五つにもなりなむ幼稚園にいれむ其折にはかゝる着物をきせかゝる帶をしめさせむさてはいかなる髮やよからむなどはてしなきあらましことにのみあかしくらして心いそがはしきをりもこの妹をみるなんうれしかりける書よむひまく\に編みし毛糸の帽子も肩掛も今は伯母上がかたみの文庫にみちぬさるにてもはやくものいひそめて姉上よとも廻らぬ舌にいひ出でなバとおもへるきのふけふふと膝に這ひかゝりたるいひしらずいとよろこバし

横山　柳子

なべての人の心は一つならず其よろこぶところかはれどもをさなきほどは四季をりく\のまとゐまたたらちねのものの給りたるいとも嬉しう思ひしかやうく\年高うなりて學の庭にをり立てバ文の林に分けいりて昔の人のおとたづねんとあさりゆくにあひしらぬ古人に只今さしむかひたる心ちしてときえざりしかずく\の事をしるこそいとうれしけれ又年月あつめし螢のひかりむなしからで學のわざを卒へたる時の心こそたとしへなう嬉しけれされどその中にもたらちねにつかうまつるなんいともく\嬉しきわざにて朝夕みひざ近くつかへてみづから勞にあづかりつゝたらちねのやすらかにおはしますをみたてまつるなん嬉しともうれしきこの上はもはら孝養をつくし女徳を全うしたる時こそまことの心のよろこびいかならんとおもへバかねて嬉しさにたへずかくなん

宮川きよ子

およそ人の世の中に立てる上はよろこびしきこともたのしきこともさてはかなしきことも腹だゝしきことも濱の眞砂の限りなきが中に許々多久の黃金得たるよりも猶一きはまさりてよろこバしきものは童子少女等が雨を凌ぎ風を忍ひて學校に通ひつゝ學の業をいそしみはげみたるしるし見えて定

期の大試業に進級の免狀を得入にすぐれて優等の賞を受けたる獨り童子少女の喜びのみならず親の身に取りてもこよなきよろこばしさの限りにこそ

碓井のぶ子

世の開くるに從ひ目に見るもの耳にきくもの秋の小草の色の如く種々樣々ありていづれがたのしきかいづれがよろこばしきか定むる事かたけれど其が中にていともよろこばしきは一昨々年の十月かしこくも大君よりくだしのたまへりし勅につゆ違はず親子睦しく共に年月を送らん事こそこよなくたふとくよろこばしけれ

松田いし子

住みなれし故鄕を雲のあなたに見て歌枕さぐらばやと都路さしてたちいでしが名古屋のとまりにて明朝はやくたちいでばやと思ふ折ふしこはいかに父上のいたつき電報にて來りぬいかでか猶豫すべき夜をこめて滊車にていそぎかへるに車も今朝ぞかりはいと〳〵おそき心地して山の景色も梅のながめもものうく故鄕につきては足もそらに我家にかへりいそぎて母上にむかひまづ何より父上はと問ひまゐらすれど一時はいとも重かりしが今ははや大方癒え給へりと聞きしうれしさげによろこぞしさの限りは此の時なりけり

梅花先春

雲上はのどけかるらんふゆふかき
ゆきにまがひてひらく梅が香　仁保基子

豐なるはるのちかづくためしには
さきだつ梅のはなもかぐはし　德永萬壽子

鶯も來つゝなくらんふゆのうちに
はるをみせたるうめのはつ花　德永輝子

君が代にのどけきはるに先だちて
にほひそめぬる梅のはなかな　千々波橘子

へだてなき垣根にたてる梅か枝も
春のとなりかはなぞにほへる　小橋幹子

にはのおもの梅さきしより梓ゆみ　小橋　幸子
春のこゝろぞうかびそめぬる

たぐひなき御代の惠にさきそめて　小野津久子
春よりさきににほふうめが香

雪つもる三山のさとにうめのはな　小野登美子
はるをもまたで咲そめにけり

春またでさきにほふかなやま里の　高野佐喜子
ゆきにともなふしらうめの花

新玉のとしのひかりやさそふらん　佐々小琴子
はるにさきだつ梅のはつはな

うるはしき花をかざして梅が枝は　佐々有鄰子
春にさきだちにほふ御代かな

冬ふかきゆきにまがへるしら梅は　澤田　春子
はるに先だちひもときにけり

うぐひすもしらじな春に先たちて　城野　政子
冬ごもりせぬうめのはつはな



副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖講

尋常小學修身書　全四册　每册七錢八厘

全　教師用　全四册　上製各册十二錢

高等小學修身書　全四册　每册九錢七厘

全　教師用　全四册　上製各册廿五錢

中學國史　全六册

高等小學國史　全三册　每册十九錢

尋常小學國史談　全二册　全十錢

發兌所　國光社

女鑑第五十四號目次

（明治二十四年八月十八日內務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强いて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年一月十九日印刷
同　年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）